

第八編  
校  
区  
史



# 第一章 榕城校区

## 第一節 榕城校区の概要

榕城校区の概要について、榕城小学校ホームページに掲載されているので、紹介する（一部補筆部分には罫線を付した）。

榕城小学校のある西之表市の市街地は海岸沿いの平地に長くのびている。北から美浜町、洲之崎と続き、西町から東町、池田、天神町、鴨女町と南北二キロメートルにわたって商店街がたなびいている。商店街の背後の山手には中西、野首、松島、中目、城、



図 8-1 榕城校区の位置

小牧、納曾、田屋敷、中野など藩政時代に武家屋敷のあった住宅地があり、貴重な史蹟や文化財の多いところである。市街地を離れた台地には、牧之峯、岳之田、小牧野、竹鶴、今年川、桃園、上之原、本立、平田など近郊農業を営んでいる農村地帯が広がっている。

榕城小学校の校地は藩政時代に島の殿様の居館（赤尾木城）であり、昔（中世の頃）からこのあたりが島の中心地であった。現在でも国や県の出先機関をはじめ、西之表市役所や諸会社、金融機関の種子島支店などが集中し、旅館や商店、飲食店も多く、種子島の政治、経済、文化の中心地であり交通上の要衝の地にもなっている（国の出先機関は平成十六年〔二〇〇四〕に下西校区へ移転した）。

市の全世帯数の約半数がこの校区に居住している（三九五三世帯／七八八七世帯＝約五〇・一割 令和五年〔二〇二三〕十一月末現在）。

## 第二節 榕城校区の成り立ち

「榕城」という名前は、種子島氏が居城に定めたところに榕の樹木があったことから、この居城を榕城と呼んでいたことに由来するというのが通説である。

中国福建省福州市は榕樹というガジュマルの大き木が市域に多数あることから榕城とも呼ばれている。明（一三六八—一六四四）の時代には福州に市舶司が置かれ、朝貢国である琉球王国の指定入港地となり、琉球館が置かれているが、種子島の人々が琉球との交流の過程でこれを知り、似た都市であるこの呼び名を当てたのではないかともいわれている（平山 一九七五、下野 二〇〇五）。

また、榕城は「赤尾木」とも呼ばれる。赤尾木について『ふるさと歴史散歩』に次のように記されている。

江戸時代、西之表村は、上西之表村、中西之表村、下西之表村に分かれていた。種子島家では、土族を城の近くに住まわせて日頃の行政や、いざという時に備えさせた。

その区域は、野首、松島、中目、小牧、納曾、中野の六郷で、府元（府本、麓）と呼ばれ、道路は一段掘り下げた「掘り切り」になっており、各屋敷ごとに広い園地を持つていた。この府元と西町、東町を特に西之表といった。

西之表は、あちこちにアコウの木が生い茂っていたことから「赤尾木」と呼ばれ、島主の館（一六四二年、旧榕城

中学校跡地の所から榕城小学校の所へ移った）も、そばに大きなアコウの木があったため、いつしか人々に「赤尾木城」と呼ばれ親しまれた。

アコウは、四国、九州、台湾の海岸から自生するクワ科の常緑高木で、枝から気根を出し、それが地中に入り新しい幹となって大木になる、この木を赤榕（雀榕）というところから、明治十一年赤尾木城跡に設置された小学校は「榕城小学校」と命名された。

大字地域から市街地へ行くことを「あかおぎに行く」と表現することもあった。

榕城校区成立の前提として、本市の行政制度を振り返ると、元禄二年（一六八九）編纂の『懐中島記』によれば、種子島は一八カ村に分かれていた。当時の本市域は、西面村・国上村・安納村・現和村・古田村・住吉村・安城村の七カ村からなっていた。なお、「西面」の読みは、「ニシノオモテ」である。「西面村」が「西之表村」に変わる時期は明らかではないが、「神社仏閣其外旧跡等札帳」（文化元年（一八〇四））には「西之表村」と記されている。西之表村は三つに区分され、北に位置する地域を上西之表、中央部を中西之表、南の地域を下西之表としていたが、それぞれが現在では上西校区・榕城校区・下西校区となっている。

赤尾木を、上・下に区分することについては、文政九年（一八二六）九月七日、城より以南を下となし、以北を上として境

界が定められたことが『種子島家譜』に記されている。

榕城校区には、明治大正期の島外からの移住によって誕生した集落もある。明治期の甑島や山川の飢饉、大正三年（一九一四）の桜島大噴火時の移住によって集落が誕生した。

また、沿岸の埋め立てによって拡大した集落もある。市街地（洲之崎・西町・東町・池田・天神町）は沿岸からの距離にして五〇～一〇〇メートル程度しか平地がなく狭隘で、宅地の需要が高まっていた。このため、沿岸を埋め立て、宅地の確保が行われた。はじめは民間により、戦後は公共事業で実施され、数次にわたる埋め立てにより新たな土地が誕生した。

さらに、大規模な宅地造成（鴨女町・美浜町・松島のうち桜が丘）や民間の小規模な開発（上之原町・朝日が丘）によって誕生した集落もある。また、牧之峯のように戦後市内各地からの志願者により開拓された集落もあり、様々な層が折り重なって現在の榕城校区が形成されている。

### 第三節 地名・字名

#### 一 大字西之表の小字一覧（上西校区、下西校区を含んでいる）

塩屋、天水、大崎、大広野、小広野、西ノ小田、火立ノ峰、大餅田、中ノ丸、小餅田、燕雀、椿嵐、花里崎、塔ノ脇、浜ノ田、鳴子小田、轟、大川、花里田、待崎、一之鳥居、神ノ園、息長野、大迫、御手洗、岩穴の上、深堀、八頭、野都牧、柏木田代、猿獅、榎迫、長迫、猿獅小田、葛松、穴野、屋所、佐保、荒平、下ノ平、大峰尾、直ノ川、上小管、下小管、酌善、黒石が田尾、出所、堀ノ木、石之有路、牧山、下松、伊勢生、下榕山、馬不騎、上立切、下立切、大梗、上榕山、高牟礼、横山田、麦嵐、大入野、内ノ野、中ノ宇都、無方の頭、長久保、河安余り、御前開、鬼ヶ沢、鬼ヶ沢山、堂ノ渡瀬、大中山、丸野、上瓜生迫、下瓜生迫、火焚松、車門、土石坂、下唐人ガ山、上唐人ガ山、杉ノ方、山ノ小田、川頭、牛首、馬込、朽木、尾細利、峰之園、上古園、上ノ住吉、山住、大宮田、与七郎、横山、桜ノ峰、深田、上ノ原、長山、平、一橋、長山平、狭渡瀬、蕨ノ平、野開、平田原、平田、源太郎、下駄、桂山、小宮田、本立、斧乙田、石堂、竹山、平嵐、烏帽子嶽、大石ノ元、中ノ田代、垂木山、奥ノ谷、猪ノ有路、横野、糺々中野、上桃ノ園、野中田、毛蘭洲、下五本松、上ノ野、前ノ田、下ノ山、大長野、池ノ小田、榎田、下五葉松、小長野、上藺牟田、井手ノ本、射場ノ本、狩

集、上五葉松、上長小田、藤七渡瀬、上五本松、鯨畑、上榎ノ細リ、松ノ隅、白地山、屋敷ノ平、佛之峰、満徳寺、榑ノ木小田、上野別府、下野別府、正建田、成水、石ノ峯、馬牛平、長深田、杵之峰、堤、白崩、池ノ窪、由利佐、田本、経ノ峰、松原、馬場、古園、上ノ山、折坂、井砂川、上宮原、下宮原、古城、北平、唐人方浦、鉄砲場、大野崎、中島、洲之崎、下大野崎、上大野崎、春日、榕西下町、榕東下町、榕東上町、榕西上町、野首、囃師ノ上、宇都、榕園、外園、大野、後松島、前松島、本城、松下、榕城、石ノ峰、小田、豊山、中谷、嘉永山、深渡瀬、西松ノ隅、北松ノ隅、中松野隅、南松野隅、下榎ノ細リ、新城出口、新城野首、茶園、馬之助、水洗入口、耳切頭、石頭甲、五舛苗、水洗鼻、地主田、五本松、牛次郎、大右工門、榑、田中野、赤坂浦、赤坂峰、桃ノ園、藺牟田、高松、犬駈、瓜生迫、今年川、平原尻、平原口、平原、池町、花木島、東涼松、西涼松、馬飼、定法作、柳田、主殿田、二ツ松、二ツ松入口、並松、今平、新城、上小牧、小牧、中城、下小牧、石原、田中、池田、黒山、下邑、納曾、田屋敷、坂ノ下、中野、南中野、北ノ山、南ノ山、雲ノ城、西ノ園、高野、摺木田、田代、城内、比良野、開、平渡瀬、萩之中峰、長磯、埴之中峰、埴十二馬迫、城之上、河頭、檜山、馬飼屋敷、峰之田、塩硝田、涼松、現和大路、西曲野、東曲野、長山之比良、淵之上、西ヨゴウ松、東ヨゴウ松、下今年川、上今年川、馬遊、周防田、大峰、曾太郎、二栗、竹鶴、須寿礼石、東門ノ頭、下之平、長山、

上池野、大窪、池ノ頭、黒土俣、下長磯、樋之下、新之小田、新之大田、小牧野、下小牧野、西小牧野、上平、山道、景之山、古河、大田、長田、河内、西門之頭、隅田、大宮田、小宮田、内之田、鳥屋ノ峰、管野、中平、赤鰻林、大榑、甲矢毛、西ノ小村、吉田作、長開、大田尾、唐竹小田、迫ノ小田、亀割、長田代、東大田代、岳ノ田、狩詰、川直、向ノ小田、平河原、高頭原、西比良、大椎、滝之元、大峰尾、秋野嵐、婆女鼻、十七木場、大山崎、正泉坊、二俣松、落嵐、蕨田代、上ノ丸、下ノ丸、大中山、山津島、帆柱、犬山、岩穴、横平、河隅、高嵐、高峰、丸山、水溜、花里坊、月夜野、河口、猿垣、上向田、下向田、大坂野、新開、七俣田、上畑、梭ヶ丸、山之口、阿僧、下阿僧、大樋之上、塩入、渡瀬、小比良嵐、屋久田、屋久田上、赤坂、赤坂ノ下、大園、東浜伏、西浜伏、池野、上ノ園、池野下、深田、田ノ神田、西行坐野、行坐野、長迫、黒牛ヶ谷、樵谷、椎山田、椎山田比良、森、苜河間伏、上ノ田、上ノ田比良、長峯、東ノ原、栗木ノ大田、稲屋、浜ノ田、西之浜、川迎、入佐、御前山、蔵野、山之尻、山之頭、多免野、西之原、名ヶ迫、岩迫、屋敷内、円山作、西之隅、東ノ隅、馬渡瀬、脱竹迫、向牧、室屋田、茶屋平、枯木橋、中ノ渡瀬、荒蒔田、上ノ河、壛泊、番屋、丸畑、若宮、南若宮、白水原、中之野、松原口、古牧、折口、大門、野別府、榑木小田、小谷、上石寺、半太坂、黒石平、尻尖、金丸田、山本、平田、桑ノ木小田、蛭町、尻切、山五郎、大荒目、増田長谷、鴻ノ峰、藤八、猿見間伏、本水口、

麦田、屋之平、川原、松元、白崩、大畑、長畑、下石寺、稗畑、  
脱竹畑、中長谷、嶽ノ中野、大流合

## 二 特徴的な地名

『種子島研究』（二二・二三号）や『ふるさと歴史散歩』を参  
考に、特徴的な地名をまとめた。

### 春 日

西町集落の西部に位置する。小字の西部は洲之崎に当たる。  
丘の上には八幡神社がある。

慈遠寺は、建立大同三年（八〇八）の律宗の寺院である。奈  
良の興福寺の末寺と伝えられている。この慈遠寺跡が現在の八  
坂神社の一角である。奈良興福寺は藤原氏の氏寺として隆盛を  
極めた。また春日大社を氏神としていた。興福寺の末寺として  
慈遠寺を位置づけるとともに、春日社に因んで寺院の後背地を  
春日山として崇めたものである。現在八幡神社のある山一帯を  
春日という。

### 御 坊

種子島家の墓地で、御坊はその語句のとおり、御寺（慈遠寺）  
の跡で、その寺の一角に造られた墓地にその名前が残っている  
ものである。

### 井ノ川

西町中心部から種子島中学校へ続く道の途中から、トンギョ  
ウの坂への入り口付近に昔は清水がわいており、西町の人々は  
大きな井戸を作って生活用水にしていたが、そのあふれた清水  
は旧慈遠寺（現八坂神社）側に流れ出し、これを井ノ川と呼ん  
でいた。

### 小射場坂

玉川招魂碑丘上の北側を流れる玉川に沿い、市役所裏門に通  
じる道路で左手は絶壁のだらだら坂である。小規模な射場があっ  
たのでこの名前がついたという。

### 鉄砲場

洲之崎のかつて種子島測候所があった場所で、現在でも「鉄  
砲場」と呼ばれている。完成した鉄砲の試射場であったことに  
由来するらしい。

### 水天宮

昔、洲之崎に大きな池があつて、その上に水天宮を祀ってい  
た。現在はエビス様（エビス神社）と同じ場所に祀っている。

### 栄町

昭和五十五年（一九八〇）から本市の町名。もとは西之表市

池田・西町の各一部と公有水面埋立地からなる。

### 田屋敷

一般的に田屋敷の地名は各地に存在する。地名の由来は、屋敷森に囲まれ、周囲に耕地を持つ。散村を形成する個々の家屋である「孤立荘宅」といわれるのがそれである。

田畑の中に誰かの屋敷があつて田屋敷という説と現在の田屋敷には池があつてそれが天神町を通り、池田の方へ流れていて、その池を用水池としたという周囲に耕地を持つ土地がらということに由来する二つの説がある。

### 城ノ浜

甲女川から鴨女町、若狭公園、川迎に続く砂浜を城ノ浜という。

城の小高い丘にある高野入道の城から見下ろされる海岸線は、美しい砂浜であつた。このことから城ノ浜と呼ばれるようになったという。

### 唐人ガ浦

「南島偉功伝」によれば、「府元の北なる古城が原の下に唐人が浦と云へる港あり、何時の比より如何なる仔細を以て斯くは名づけしやらん。或いは往古、唐人の来たりて貿易せしに因るか、又は、支那人の始て（初めて）漂着せしことありしに因り

て名づけしか。未だ其の詳を考へずと雖も、古来支那と関係ありし紀念と為すに足れり」。いわれははっきりしないが貿易関係によるものではないだろうか（傍線は補筆）。

### トンギヨウの坂

野首の上がり口の坂をトンギヨウの坂（西町から野首へ行く坂）という。これは地形が突角になっているからという。トンギヨウのイカという言葉がある。とがっているイカの意味である。

### 小路口

野首の道は、宮原や上西方面に往来する重要な道であつた。中の狭い通路には、いくつも路地や門口があつて、なかでも、現在の中目医院付近は、特に狭い所だったので、土地の人々は小路口と呼んだ。

### 本城

「南島偉功伝」によると、種子島氏の入島以来、最初の城が本城であつたという。本城は旧種子島高校（現種子島中学校）の一带であり、縄文前期の遺跡があることで知られている。

### 深渡瀬

もともと深い谷川のある山林原野であつたが、公有水面埋め

立て工事の埋め立て用土砂として利用するためと、宅地造成のために、陸上自衛隊の訓練として、山を砕き、谷を埋めて現在の桜が丘が誕生した。

現在宅地造成が行われて、市営、県営のアパートが立ち並び、住宅団地となっている。一部は大字桜が丘となっている。

中目

中目は島主が住んでいた場所で、榕城（赤尾木城）があった。ここから種子島の中心の地、「中目」と名がついたのではなからうか。

松下

中目の氏神の松の木の下にあるためであろう。

豊山

榕城小学校の校庭の東側の一段高い地を豊山という。山から城内への給水のため「樋」を設けていたことで「樋之山」がなまって「テノヤマ」になり「テンニヤマ」となったといわれている。

門前

お寺の前という意味である。門前には本源寺と万徳寺という二つのお寺がある。その関係で「門前」という名がついたのだ

らう。なお、万徳寺は上之原町の旧種子島実業高校（現種子島高校）の近くに移転している。

井の

島主がいつも使用していた井戸がある場所で、他の井戸の水が渴れても、その井戸だけは水が渴れなかったという。その井戸は大きな石で井筒を作っている。そのためにその上にある屋敷を「井の上の屋敷」という。

ムクヨモ坂

田屋敷から中野に上がる小坂をムクヨモ坂というが、これは雲城にその墓がある古市空笑からきたものである。

ずく山

天神橋から甲女川の北沿いの道を上流へ歩き、高浜橋の手前から左へ入る道の一部を「ずく山」という。ずくは銑鉄（精錬する前の不純物の多い鉄）のことで、この辺りに製鉄所か鍛冶屋があったと考えられる。

馬飼屋敷・馬飼

旧種子島実業高校（現種子島高校）近くの墓地公園から桃園へしばらく行くと、三栄石油充填所がある。三〇〇ほど道路から右手が「馬飼屋敷」、左手が「馬飼」と呼ばれている。

このようなおもしろい地名の由来は、島主時代あるいはそれ以前に馬飼屋敷は、馬を飼育する人々の屋敷があり、また、馬飼は馬を養い育てた場所であることからついたという。

『薩隅日地理纂考』にも、馬飼に関する記事がある。天武天皇六年（六七七）十一月、種子島に馬飼部連なる人物を大使として派遣したという。これから派生した地名であれば地名の由来が大変古いことになる。

#### 塩硝田

馬飼屋敷、馬飼と呼ばれる場所から桃園へ約三〇〇メートルほど行った右手を「塩硝田」という。島主時代に鉄砲の火薬の材料である硝石を作っていたことからその名がついたという。

### 第四節 歴史的特殊性

#### 一 麓と呼ばれる歴史的な地域

榕城校区は、古くから島主の居住地として政治の中枢部が存在し、居城を取り巻くように家臣、武士の居住地が配置された。

これらの集落はひとくくりにフモト（麓、府本、府元。これらの表記は、『種子島家譜』にいずれも見られる）と呼ばれている。また、野首・松島・中目・小牧・納曾・中野（田屋敷、天神は納曾に含まれていた）は、六郷とも呼ばれていた。

麓集落の特徴として、江戸時代からの教育組織として郷中その流れをくむ共立社が存在した。郷中から共立社について、柳田桃太郎著『種子島の人』の「平山伝一郎武世」の項目から一部抜粋する。

江戸時代後期、小牧生まれの平山伝一郎武世（一七七四―一八四七）は、かねてより本島の発展は、まず、人づくりが第一と考えていて、中でも若者の教育が必要と、先輩の家老や物奉行らに、これを披瀝、賛意を得、本藩ならぬ「社」をつくり、学問と武芸を奨励することにした。この社の結成の年月は、家譜にみられないが、前後の記事や武世の生涯からしても、用人や講談役に命ぜられた、文政二年、四十五のころと思われる。

この社を薩藩では、郷中ごうちゆうといい、幼児や青少年を集めて

表8-1 共立社の名称

地区	名称
野首	野久尾共立社
松島	由紀社
中目	共立社
小牧	翁研社 (舎)
納曾	共進社
中野	共立社
東町	黒山学舎
中西	共立夜学舎

心身を鍛錬し、徹底した硬教育で実績をあげていた。武世は、この郷中教育を取り入れ、若年層に文武を奨励し、大いに士気をあげんと、先ず、赤尾木の府元を、六方限に分けた。今の野首・松島・中目・小牧・納曾・中野の小字である。一方限は、戸数にして約数十戸であつたらうが、この方限の男子は、五、六才より二十四才まで、必ず加盟しなければならず、毎月定めの集会日に、年長者は経書の指導、道義の訓話、また、武芸の指導に励み、違反する者あれば厳しい定めの制裁を加えたから、みる間に若者達の士気は高揚され、武道は勿論学芸も振興したのである。後世、よくこの島の学芸の開花は、文政・天保のころよ里といわれるが、その原因は、おそらく、ここらにあるのではあるまいか。

これは長く継承され、筆者の小学時代、大正中期ころまで行われていた。各郷には、各々学社(舎)があり、年少クラス、年長クラスに分けられ、年長クラスは一五歳以上

二五歳位を以って経書の指導、道義の訓話、また心身の鍛錬を目的として、スパルタ式教育を行った(翁研平山武教)。

### 石敢當

麓の特徴的なものに石敢當がある。石敢當は、せつかんとう、せきかんとう、いしがんとう、いしがんどうなどと呼ばれ、丁字路や曲がり角の突き当たりなどに設けられている「石敢當」などの文字が刻まれた魔除けの石碑や石標のことである。中国で発祥したもので、日本では主に沖縄県や鹿児島県に多く分布している。

本市内に残る石敢當は、確認できたものは市全体で一〇基であり、榕城校区七基(中目二基、納曾三基、野首一基、天神町一基)、下西校区一基(池野一基)、住吉校区二基(能野里二基)である。

各校区の石敢當の位置は、表8-12のとおりである。

表8-2 各校区内の石敢當

校区	地区	場所
榕城	中目	月窓亭の西
		榕城小学校南西角の南
	納曾	楢原氏宅
		楢原行信氏宅 上妻氏宅
野首	本田芳嗣氏宅付近	
	天神橋東側南民家	
下西	池野	西之表自動車整備工場
住吉	能野里	能野里公民館から南に100m
	住吉能野里	住吉窯入り口



榕城小学校南の石敢當

る。

これらの石敢當は松島、野首などでも昔は多く見られたようであるが、道路改良などで撤去されたようだ。道路拡幅や擁壁、ブロック塀、街灯の普及で、「魔物」という概念が薄れ、現在ではその必要性が希薄になったことも減少の要因と思われる。ほかにも気づかれないまま存在しているものがあるかもしれない。

## 二 三 ヶ 浦

本市に位置する三ヶ浦は、「池田浦」「洲之崎浦」「壺泊浦」のことを指し、漁業を生業とする浦である。西之表港（旧赤尾

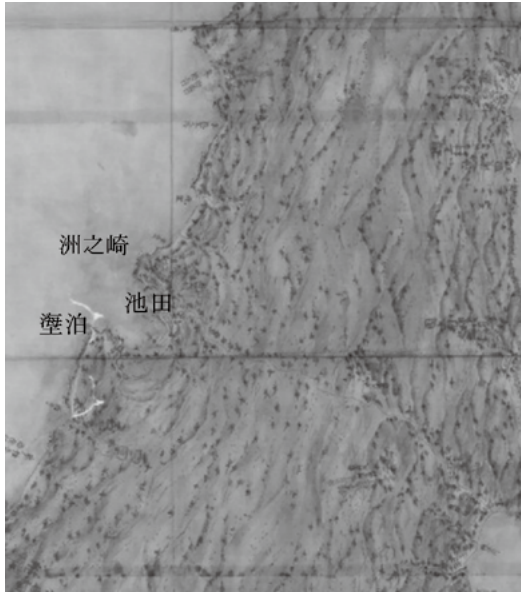


図8-2 三ヶ浦の位置

(『大隅國熊毛郡種子嶋沿海圖』を改変)  
(京都大学附属図書館所蔵)

木港)を取り囲み、馬毛島と密接な関係にある漁村であった。藩政時代は、種子島氏が治める赤尾木城下で海事の重要な役割を果たした舟人集団でもあった。

### 三ヶ浦の歴史(馬毛島を含む)

種子島氏初代島主信基が鎌倉から下向後、島主から水手として用命し、本土との交易でも多くの労をたびたび提供したと伝わる。すなわち江戸時代以前より、三ヶ浦は、漁業をしながら、大坂・堺・京都・紀州との行き来等海に関することに従事していたことがわかる。

三ヶ浦の舟人は、種子島家の上洛、遠征などの指示を待っている海の強者たちのことである。海事に関しては、あらゆることを想定して二十家衆の役人の指導に従い、技術を磨いていくのが務めであった。日頃磨き上げた舟人の働きが島の発展に寄与したことは間違いない。

宝暦十三年(一七六三)八月、洲之崎浦の旧記として次の記録がある。馬毛島での漁業権が三ヶ浦に与えられた。

一、宝暦中洲之崎ノ旧記ニ宝暦十三未八月

旧主ヨリ馬毛島ノ漁業ヲ池田洲之崎海土泊ノ三ヶ浦へ差許サル因テ同島運上トシテ各銭壹貫參百文ヲ旧主ノ船手へ納メ同年全島諸浦始テ浦受銭各壹貫六百文ヲ同所へ納ムトアリ

馬毛島の漁業権が与えられた代わりに、次のような義務があつ

た。

- 一、島主所有の三隻の御厨船（みくりやぶね、台所船、お召船）の操船、修理、海上移動に関する一切の役目。
- 二、台風の時、赤尾木湾での非常警備体制。台所船の警護には、各浦一名の割り当てがあった。
- 三、時化しげの時、輪番制で泊まり込む。自然災害に対処。
- 四、地津回しという運送業務の発生時の責務。
- 五、種子島近海や馬毛島で遭難した船や外国船を小舟で赤尾木港に曳航する。その警護の役目をする。また問題が生ずれば山川港まで曳船。
- 六、九日ごとの御用肴ごようさかなの提供。
- 七、島主が滞在中は、毎日御日肴おひさかなを届ける。御日肴とは、種子島一八漁村を二浦ずつに分けて、毎日鮮魚を城に届ける役目である。
- 八、操船を担うので技術の訓練をする。島主が上洛する時、参勤交代の時、島主や島主家族が薩摩と行き来する時、書簡の往復には三ヶ浦の舟人が中心になった。すなわち、漁業に関わりながら、船頭、船漕ぎ、水手の役目をし、航海術を修練する。
- 九、戦役の時、軍船の操縦に携わる。時によっては、戦う。
- 一〇、王籠浦には、船番所があった。大隅海峡を通過する外国船の見張り。屋久島からの材木、平木など薩摩藩

で無許可搬出の見張りの場所であった。

### 三ヶ浦の格付け

三ヶ浦には、厳格な格付けがなされていた。

長男格：池田浦

二男格：洲之崎浦

三男格：漣泊浦

三ヶ浦の会議のときには、池田浦が絶対的な権限を持つており、船奉行が総元締めとして置かれた。船奉行「二十家」の衆たちは、主に檜原家・山縣家であり、船奉行のもとで、舟人たちはまとまっていた。

「二十家」とは、種子島氏初代信基の付き人として鎌倉からともに来島したとされる譜代の家臣団のことである。「二十人家」又は「二十家」と呼ばれ、常に二〇家を超えないようにされていた。「二十家」は、主に赤尾木の津口番つぐちばんを務め、主として船手方として海上の交通、交易に携わる家のことである。時代によってメンバーとなる家門は変化するが、「二十家」たちが船手・船頭となり、三ヶ浦の舟人たちとともに重要な役目を担った。馬毛島は、船長家部二十家衆・山縣家・檜原家と水手家部舟人の島であった。

馬毛島は、古来大宰府の管轄であったが、後に種子島氏の所轄になった。西之表港から西方海上約一〇キロメの位置に横たわる周囲一二キロメの島で、一番高い所は岳之腰で、海拔七一メートルで



図8-3 馬毛島



王籠港 (下野敏見氏撮影)



高坊港 (下野敏見氏撮影)



葉山港 (下野敏見氏撮影)

あった。本市の西海岸では、どこからでも海上に横たわる馬毛島を見ることがができる。馬毛島は、種子島と兄弟の島である。馬毛鹿が憩い、蘇鉄が茂り、草原が広がり、特に三ヶ浦の舟人にとっては、種子島と切り離せない島であった。

馬毛島での三ヶ浦の港は、次のとおりである。

池田浦：王籠港

洲之崎浦：高坊港

壺泊浦：葉山港

島主種子島氏の統治が終わり国家の統制下に入ると、明治十九年（一八八六）に漁業組合ができた。同三十二年政府縁故払下げとなり、土地の個人への売買が可能となった。

池田浦・洲之崎浦・壺泊浦の住人は、この時期に各浦の馬毛島の漁業基地に本籍地と現住所の移転登記をすることになった。

池田浦人は王籠浦に、洲之崎浦人は高坊浦に、壺泊浦人は葉山浦に登記した。

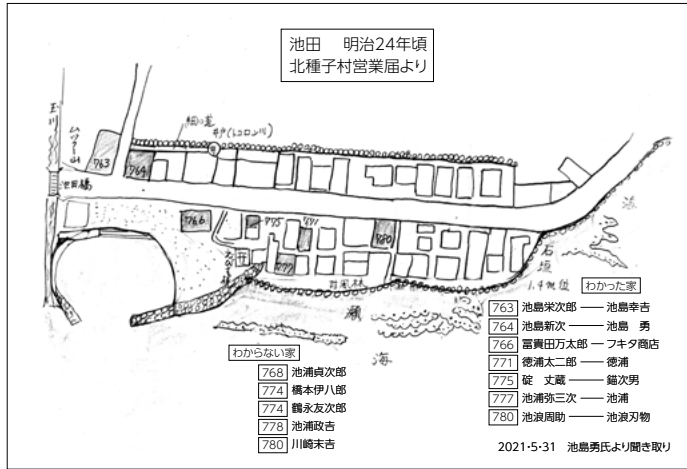
馬毛島周辺は豊かな漁場であったため、浦人により

これまで守られてきた占有の漁区にはかの浦から人が入り、乱獲が始まった。三ヶ浦の浦人は、生活の安定と代々の権利保全を願って当時の県会議員である上妻宗周に陳情書作成を依頼、

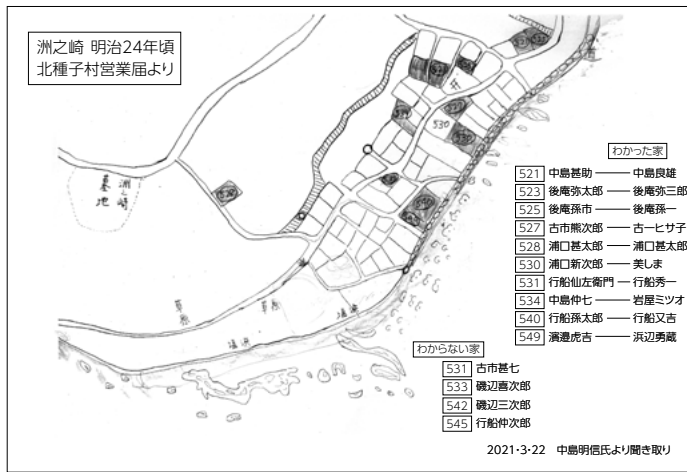


漁区記碑 (坂中睦男著『想い出の馬毛島』から再掲)

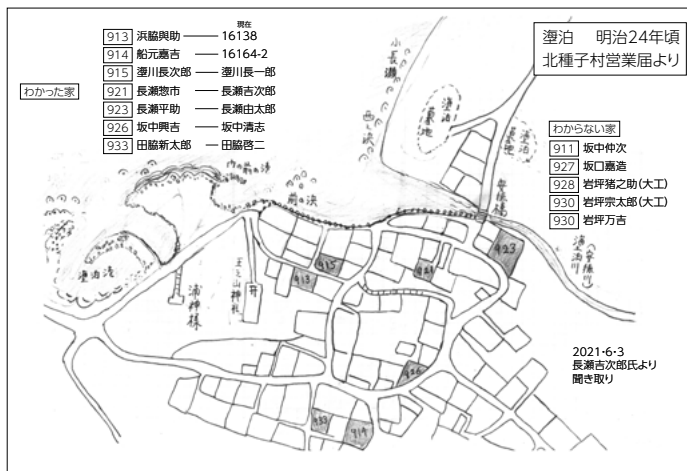
第4節 歴史的特殊性



池 田



洲 之 崎



湊 泊

図8-4 明治24年頃の三ヶ浦の港(馬毛島)

宗周は上京、政府に交渉した。江戸時代島主から与えられた権利を一旦国に返納し、その後買い取る形で取り戻すことで、馬毛島四町三反一〇歩を三ヶ浦が共同入会地として権利を確保した。この記念として、馬毛島葉山港に「馬毛島漁区記」の石碑が立っている。「明治三十四年五月、平山寛蔵撰、子島時世書、池田浦洲之崎浦湊泊住吉四箇浦中謹撰」と記載されている。池田浦を中心にして会議を開き、各浦における地先権(明治

時代に四ヶ浦に払い下げられる)、刺し網、海草、魚介類の採取、トビウオ捕りの協約を決めた。馬毛島は、三ヶ浦を中心にして、トビウオ捕り・ナガラメ潜・ブリ引き(芭蕉の葉を使って魚を追いつまむ威し漁法)・潜突き(すみつき)・プト引き(天草とり)ができる良い漁場であった。「馬毛島渡り」の打ち合わせは、池田浦を中心に行われた。三ヶ浦の漁民は、三月末から四月初め、トビウオ網仕立てを

始める。

「馬毛島渡り」は五月八十八夜の頃で、まず男だけが馬毛島に行きトビウオ漁を行う。次は女性や子供が馬毛島に渡る「春磯わたり」で、この期間学校は休みとなった。

一方馬毛島に開拓農民が昭和二十六年（一九五二）～三十年からにかけて入植し、小中学校、郵便局、雑貨店、民宿ができるなど賑わいを見せていた。三ヶ浦の漁民の中にも馬毛島に住むようになる者もいた。農業を営む者も出てきて、農民は最終的にサトウキビを作り、製糖工場ができた。その後酪農学園大学短期大学の卒業生が入植し、牧場経営を始めたが成功しなかった。昭和三十七年と同四十一年に馬毛島を訪れた民俗学者の宮本常一氏は『宮本常一離島論集第四巻』に当時の馬毛島開発の困難さを記している。

昭和三十年代後半からトビウオが捕れなくなってきた。また、馬毛島のほとんどを東京の開発会社によって買い占められた。一九七〇年代に始まったレジャー施設など大規模開発計画、その後石油備蓄基地の誘致で定住していた三ヶ浦漁民はこぞって馬毛島から離れた。令和五年（二〇二三）現在、馬毛島は、航空自衛隊基地として整備が進められている。池田浦は、浦人総意で馬毛島の地権を手放し、洲之崎も共有地を手放した。遼泊は意見が二つに分かれ、船祝いなどの年中行事も中止になっている。現在は、馬毛島で漁することも少なくなり、浦々の茅葺の漁師小屋も基礎を残すのみとなっている。

## 浦の組織

### （一）役 職

浦のまとめ役・長として弁指べんさしが正月二日の組合総会で選ばれる。任期は一年である。その役目は、次のようなものだった。

○浦で起こった問題の解決をする。浦に関する諸事項の立会人をする。

○公的機関との交渉事。

○トビウオ捕りに参加する各浦との交渉事。

○潮見。魚が海岸に押し寄せてきたら、ほかの浦人に連絡する。

○網仕立てなどの企画。集会の準備。

○一カ月に一回シユエーとシババナをエビス様に供える。

浦人は、弁指を中心としてまとめ、総出の作業についても最優先で協力・実行していた。

松田（一九九八）によれば、弁指は、もともとは平安時代荘園の収穫上納物を集めて中央へ送る輸送官の役目をしてきた人の呼称である。後世エビス神や網の管理などをする漁村の役目に変わった。弁指は、九州全域に残されているが種子島が南限である。

### （二）浦の組織の成り立ち

青年会（実行部隊・一五～二五歳）

中学を卒業してトビウオ捕りに参加できる青年から構成される。青年会の統制を乱す者がいたら全体責任となる。目に余る

迷惑行為は、指摘される。漁の際の指導は厳しかった。命を懸けて、海で漁をする人間として、一人前の漁師とするためであったという。

その他、船主会や壮年長老会、婦人会や処女会があった。

### トビウオ捕り

#### (1) 浦人の生活

トビウオ捕りは、沖永良部あたりから伝わったのではないかとされている。天明四年（一七八四）四月十八日の記録に、屋久島でトビウオ漁労が始まったとある。それまでは地引網が主流であったので、トビウオ捕りは、捕漁にとつて大革命であった。次第に地引網は副次的となり、浦人生活はトビウオ漁中心になった。

トビウオ漁の時期は、五、七月で、男性は八十八夜前後に馬毛島に渡った。これには「馬毛島渡り」、又は「春磯渡り」という情緒ある言葉が残っている。「春磯渡り」は、浦人にとつて一番の楽しみであり、活気に満ち溢れた時期である。ブト引き（天草とり）が決定されると、婦人や子どもたちなど浦全員で馬毛島に渡った。子どもたちも学校が休みになり、一緒に馬毛島に渡ったが、小さい子どもは連れて行くのが難しいため、親戚に預けられた。託児所も開かれ、処女会の人たちが子どもたちの面倒を見た。春磯渡りの前は、婦人たちは、大忙しであった。三カ月分の労働着を川で洗濯した。池田はタンタン川（玉

川）で、遼泊は安徳川の上流で洗濯したという。布団も用意しなければならぬので、「馬毛箱」と呼ばれる衣装箱に入れて準備した。浦は半農半漁であるから、それまでに婦人たちは、畑仕事をしておかなければならなかった。田植への準備、唐芋の植え付けは主に女性たちの仕事であった。池田は上之原町、洲之崎は浦の後ろの高台と上之原町、遼泊の畑は若宮平にあった。遼泊は、現在ホテルやドラッグストアが建ち並ぶ平らな場所に安徳川の水を引いて田んぼを作っていた。池田の婦人たちは、肥えタンゴ（糞尿を入れて運ぶ桶）を天秤棒で担いで上之原町まで坂を上がっていかなければならなかった。肥えタンゴの上には、芭蕉の葉がかぶせてあったが、こぼれることがあり、大変であったと浦人は語っている。上之原町にある洲之崎の人々の畑には、寝泊まりできる小さな小屋があった。どういうわけか、小さい子どもだけで泊まっていて、夜淋しくて大泣きして上之原町から帰ってくることもあったという。また、帰る道々が怖かったそうである。遼泊の畑の若宮平は、浦のすぐそばにある台地である。冬は、ヒユウヒユウと海風の吹くところで寒水原（白水原）とも呼ばれている。大隅の鎌倉御家人であった野辺氏と野辺盛純を祀った若宮様の祠があったところで、近くを通るときは、「ちゃんとお参りしなさい」とよく言われた。

#### (2) 漁の手法

馬毛島でのトビウオ捕りは、浦総出の共同作業である。岳之腰（嶽の腰。馬毛島で一番高い所）に各浦から当番を一人ずつ出



馬毛島でのトビウオ漁

を見ることができた。合図がある前に網を入れてはいけないといふ決まりであった。岳之腰には、合図確認の重要な役割があった。午前二時頃、馬毛島の各浦々の小屋では、弁指が浦中を回って「おきれえ〜 おきれえ〜」と大声を出し、浦人はいっせいに飛び起きた。自分でお茶を沸かして一服し、先を競ってトビウオ船に走り込み、捕れそうな場所に待機して岳之腰からの合図を待つ。二隻一組（二丈口）で組み漁をし、一隻に七人ぐらい乗った。各浦総勢約七〇人余りの船団であったが、各浦で漁師が足りないときは、佐多・大泊・山川から人を雇った。トビウオは、雄雌時を合わせて集結し、羽を広げ海面に浮上する。メスは藻に放卵し、オスも、一斉に放精する。トビウオ

して、トビウオの網を何時入れていいか話し合う。暗いときは、岳之腰に灯りをともし、海上で待機している船団に網入れのタイミングを知らせ、明るい昼間は旗で知らせた。馬毛島の沿岸どこからでもその知らせ

が放って浮遊したアゴで海面が白く濁る。トビウオは、アゴを放つと一斉に沖に向かうので、すかさず潜み手がトビウオの行動を監視する。岳之腰から待ちに待った合図。潜み手がトビウオの群れの位置を手を挙げて知らせる。潜み手は、潜る仕事のため危険であり過酷な仕事のため、マイテ（配当）は普通の漁師の倍あったという。トビウオの群れを二隻に張った袋網ですくい捕る。漁師たちは、掛け声を上げ、戦場のようであった。「のしたあ のしたあ〜」の号令、「まわせえ〜 まわせえ〜」の掛け声で跳ねるトビウオの群れいっばいの網が船に引き上げられる。トビウオ満載の船は、浦の旗、大漁の旗をなびかせて西之表港目指して全速力で走り込んだ。海上に大漁旗をたなびかせて勢いよく西之表を目指して走り込む船団に、三ヶ浦の女性や子どもたちは、自分の浦の旗を見つけて歓喜する。太鼓、三味線を弾き賑やかに船団を迎え入れ、炭坑節、はんや節など女性たちの賑やかな踊りが浜やエビス神社の前の広場で繰り広げられる。女性の裸踊りもあったという。

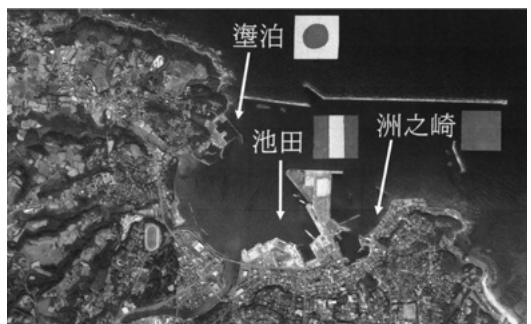


図8-5 三ヶ浦の位置と旗  
壺泊浦は日の丸、洲之崎は赤一色、池田浦は赤白赤の旗である



えんかんの様子 (下野敏見氏撮影)

このようにして男たちの働きの大漁を祝った。大漁のときは、一網三万匹かかるとあるが、大体五〇〇〇〜一万匹である。大漁になると鹿兒島からの鮮魚船を西之表港に寄港するように手配し、氷、塩を手配し、西之表の町も潤った。値崩れしたトビウオは、引き戻しとして女性たちの手で開かれ、塩漬けにして干される。これを「えんかん」という。トビウオ漁の時期である五〜七月の海辺には、トビウオが干された光景が広がっていた。

また女性たちは、籠かごにトビウオを入れ、いない棒（担い棒）で担いで麓、集落に売りに歩く。これを駄売りといい、干物を唐草模様の風呂敷に包み、担いで国上や武部まで行った。武部までは、七キロメートル近くもある。集落の人たちも、魚を待つており、

米や野菜などと物々交換したという。

大正二年（一九一三）、大阪から移住した森林吉五郎（当時二八歳）の記録が残っている。これによると、森林は、一時間に三里（二キロメートル）の速さで住吉まで走り、イワシを仕入れた。檐籠に魚を入れ、横棒（オウコ）で担ぎ、桃園に行商

に行った。留守番をしていた老婆が親切に一軒一軒連れて行ってくれたおかげで全部売れたそうである。行商は現金取引が僅か、粃や野菜、卵と物々交換である。芋ご飯を出され「それを食べなければ品物を買わぬ」と言われることもあり、森林は「種子島の人は、親切で他人に馳走をするのが好きである」と記している。

### (3) トビウオ捕りの配当

浦の配当は、昔ながらの配当法で配分は、平等の観念に徹している。種子島では、資本主義的な経営は行われなかった。

配当分のトビウオを港に取りに行き、集落全体に配られ、浦は助け合いながら生活する。配当されるトビウオの数は、組合の決まりによって配られる。船持ち、役持ち、兄弟の多い家族には、多数の配当があり、漁に参加した人にも配当される。馬毛島のトビウオ捕りは、皆がよくなるように、集落総出の組合事業であり、相互扶助の精神が重要とされた。集落から一人の脱落者も出さないよう「生き後家」（戦争に夫が召集されている）「死に後家」たちにも篤い配慮があった。またその子どもたちを組合に預け、生き方を仕込んでもらい自立できるようにした。

### (4) 祝宴「イザケ」大漁の祝い

特別に大漁したときは、感謝と航行の安全を祈願して浦の全員で祝った。イザケ（祝宴）の触れが出ると皆落ち着かなくなり、各人刺身や煮つけなどを重箱や皿に入れて持ち寄った。浦

人は各自箸や皿を持って参加し、「樽歌」を静粛に合唱してイザケが始まる。このイザケは、威厳のあるものであった。その後弁指を中心にして自由に飲んだり、語ったりする。このとき年長者たちから青年たちへの生活に関する指導もある。昭和四十年頃まで行われ現在は、見られなくなった。「ロッパウ」や「セッコンダー」も行われた。ロッパウは、笑いの語りもので早口でしゃべり、面白さを打ち出すのが特色である。荒唐無稽のおかしさが特徴である。

ロッパウ

豊後の国は、ぶめーて通り

肥後の国は、ひーて通り

西の海にチャップリコー

東の海にもチャップリコー

駿河の国は、すめーて通り

讃岐の国はさめーて通り

「セッコンダー」は、トビウオが押し寄せてくるように、「セッコンダー、セッコンダー」との掛け声で押し合い、引き合いしながら「押しくらまんじゅう」のようなことをしながら楽しむもので、数年に一度の大漁の際に行った。

また、不漁のときもマン直し（禍を取り除く意味）にイザケをした。

## 信仰・神社

### (1) エビス神信仰

漁村では、エビス神信仰が一番大切であり、各浦には必ずエビス神社が祀られている。昔は、漁に出る前、帰ってきたときは必ず参拝するものだった。

川崎（一九八四）によれば、エビス信仰の根源をたどると大阪西宮の西宮神社で、ここから全国に伝播した。種子島のエビス信仰は、伝播源の中世の頃の姿を残している民俗神である。ご神体は、ほとんど海の自然石である。海底の石を祀ることは、マナ（人、物に内在する超能力的力）的呪力によって沖の魚類を引き寄せる力があると信じられている。（『鹿児島民具』十二号）

### (2) 三ヶ浦のエビス神社

#### 池田のエビス神社

西之表市商工会の前にあり、昔と同じ場所である。ご神体は丸い石一個である。令和五年現在、エビス像がある。

#### 洲之崎のエビス神社

昔から移動していない。八幡神社の下にあった水天宮が合祀されている。ご神体は、海に潜って取ってきた細長い石である。

#### 壱泊のエビス神社

港に面した雑木林の入り口に位置している。ご神体は、楕円状の石大小十個位と大岩の下に球状の石が三個ならべてある。現在は、エビス像もある。以前は、弁指の家、公民館に祀られ



湊泊のエビス神社



池田のエビス神社



湊泊の古いエビス



洲之崎のエビス神社

であったが、現在の場所にエビス神社として祀られてある。

林の中に船元家が管理するエビス様があったが、これも現在は、エビス神社に合祀されている。以前は階段と鳥居があったが、現在は、道もなくヒツソリと祠があるのみとなっている。

エビス神社の祭日は、三月の願立て・六、七月の六月燈・九、十月の願成就となっている。

トビウオ漁の期間は、エビス様は、船に乗せられて馬毛島の各浦に約三カ月移され、トビウオ弁指は毎日参拝した。イザケや大漁祝いのときは、エビス様に報告した。

### (3) 船 霊 様

船のアカマ(ナカノマ)には、船霊様ふなたまごが祀つてある。船霊様には、次のような言い伝えがある。「船に四つ足のものは、入るてはいけない」「船霊様は、女の神様なので、女性は一人で乗ってはいけない」「一人でやむをえず乗るときは、なんでもいから人形を持って乗らなければいけない」。船霊様は、女性の神様なので、嫉妬するのである。

### (4) 馬毛島の葉山神社(葉山八幡宮。おじゃいどころ。)

坂中(二〇一六)によると、池田浦が管理していた。能野の山本家の先祖が大宰府から派遣され「国の祭り事」の官史(神祇官)を務めた際、形之山に神社を建立したのが葉山神社の起源である。馬毛島の葉山港周辺は葉山と呼ばれた。山本家の子孫が馬毛島の守り神として馬毛島に建立、管理、参拝しており、種子島氏が来てからも山本家が管理していた。しかし宝暦十三

年（一七六三）、三ヶ浦に馬毛島の漁業権が与えられるとともに池田浦が、葉山神社と葉山浦の管理を任されるようになった。葉山神社は、三ヶ浦の氏神様として浦人に守られ、魚が捕れた際は、葉山神社にもお供えした。葉山神社は、宝暦十三年以来、池田浦・洲之崎浦・漣泊浦が山本家に代わり祭事を行った。池田浦が自浦のエビス様と同様に祭事を行い、葉山神社は池田浦の神様になった。共有地売渡の問題が起こり、葉山神社のご神体は種子島に移された。現在は池田浦の氏神様と一緒に祀られているという（坂中 二〇一六）。

葉山浦は、はじめ池田浦の港であり、池田浦に船奉行が置かれていたので葉山浦と葉山神社を管理する権限が与えられていた。しかしどうして池田浦は、王籠浦に移ったのであろうか。馬毛島の西海岸の方が魚がよく捕れるとも言われ、また春磯の頃の北東の風が葉山港に強く吹き込む。これが原因で王籠浦に移ったのではないかと言われている。

#### （5）漣泊の王之山（大野山）神社

言い伝えとして次のように伝わっている。漣泊浦は、舟人二人から始まった。寿永二年（一一八三）の平家の都落ち、元暦二年（一一八五）の壇ノ浦の戦いと、舟人たちは幾多の海戦を乗り切り安徳天皇をお守りして漣泊に着いた。漣泊は、船漕ぎ衆たち、舟人の末裔である。その後安徳天皇は、漣泊に小集団を残して硫黄島に落ち延びられた。そのようなわけで王之山神社は、安徳天皇を祀っている。それ以来漣泊の舟人たちは、

大事に安徳天皇をお守りしており、漣泊の大事な氏神様である。江戸末期から明治期の学者・教育者である前田豊山が明治二十九年九月に「王之山祠堂記」を記した。王之山神社の鳥居の側に現在も石碑が建っている。『種子島碑文集第一集』から、碑文の現代語訳を一部抜粋する。

漣泊浦あに当時駐蹕の処にして、よつて以て王之山と名づくるか。（中略）王と皇と国音相

同じ、その安徳帝を指すこと、

山名以て証すべし、鏡と鉦とけだし当時の遺物、また以て証すべし、しかる後口碑の我をあざむかざるを知る。しかして鎮座本紀（硫黄島三所大権現鎮座本紀）また以て信ずるに足る。

#### （6）若宮神社

漣泊王之山神社の右にある小さな祠が若宮神社であり、野辺盛純（若宮様）を祀つてある。若宮様には、悲しい話が伝わっている。種子島家七代頼時の時代、六代時充の外孫野辺盛純が家来芝氏とともに来島していた。時充は、盛純を大層可愛いがつていたので、家来たちが疑心暗鬼で八代を孫の清時に譲らず盛純にするのではないかと諫言かたげん。それを聞いた清時が城ノ浜で盛



王之山神社



若宮神社

純を殺したのである。盛純は、一八歳の若者であった。最初は茅原弓場（現在の小牧公民館）に葬られた。芝氏は、志布志に帰らず、盛純を大隅の見える漣泊白石（寒水原）に葬り直し、供養を欠かさなかったという。時代は下つて幕末松寿院の時代。松寿院は当時、「本法院若宮日妙居士」と諡おくりなされて川迎の妙泉寺に祀られていた若宮様に心を寄せた。当時赤尾木港築港事業を行っていた松寿院が教書を万延元年（一八六〇）に出している。その教書は次のような内容であった（括弧内補筆）。

波止の工事は、大工事になります。大野山（王之山）あたりから石などいただきます。この神様には、事業が成就しましたら、お礼に社殿を新しく建立いたします。若宮様は、

妙泉寺におられると  
のことですが箱崎あ  
たりに御縁のある神  
様とのこと、白石の  
あたり又は大野山様  
（王之山）と同居  
かいらっしやりたい  
ところに籤くじを引いて  
お望みの処へ「降福  
権現」としてお取立  
ていたします。  
籤を引いて白石寒水原

にと出たのであろうか、松寿院はそこに社殿を立てて祀った。若宮様は、無念の死を遂げられたので、崇る神として浦人に恐れられていた。昭和十六年に巫女の籤言しんげんにより現在の王之山神社境内に新しい社殿を建ててお祀りし、これ以後崇りはなくなつたという。

#### 年中行事

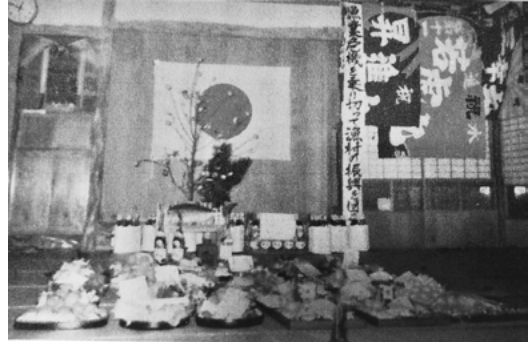
##### （一）元 旦

朝早く（日の出時刻）波打ち際に行き、清めの潮水（シュー・潮井）を茶碗に汲み、手頃な藻（ホンダワラ等）を茶碗の海水に浸して雁木に行き、藻を振りながら自分の船を表から鱸うなぎ（とも）まで払い清める。現在、藻が少なくなつたので木の葉を用いる。各家主は、自分の船の船神様を清めお神酒の焼酎を上げてから船神様を家に連れて帰り、家の周りを清める。

門口・玄関・各部屋・仏壇・小座を清めて船神様を床の左に納める。子どもたちは、お神酒を持って山の高台にある浦神様にお参りしてオセンマイをいただく。



シューーとり（下野敏見氏撮影）



鹽泊の船祝い（長瀬吉次郎氏提供）

(2) 船祝い（ふない  
わあ） 鹽泊の例

毎年正月二日午後三時から宴会があった。招待者は、種子島家・県庁の役人・船大工・漁業組合長・日典寺の師匠である。集落参加者は、本組合員・準組合員であった。トビウオ捕り、プり引き、カマス引き、組合事業の漁に関する全ての人たちが会宅（公民館）に集

歌之助 艫こまえー、艫に申す

皆の人 何と承りましょう、

歌 時ころ、塩面しお、よさそう

にござる、表は錨いかりに向きます、

皆 それ一代ようござりましょう、

歌 やでーくくくくやーぞう、やーぞう

皆 やーぞうくくく

歌 いーぞうくくく

歌は、舟人たちの歓喜とめでたさをのせて延々と厳粛に続く。

この歌が終わったあと、「お吸い物いただき」があり、また「カレヨシ」と「船唄」が長々と歌われる。ここまで二時間に及ぶことがある。

このようにして式が終わると、飲み会が始まる。年配者たちは、この年のトビウオ捕りのことなどを話し、スズリブタの肴をつまみながら話は佳境に入り、宴はたけなわとなる。

青年や青年会に入る年齢に達していないチチー青年は、座っている暇もないくらい忙しい。

古老曰く「殿様を接待するときの言葉は、標準語を使わなければならず体を使うよりも何倍も難儀したものだった」と言う。江戸時代以前から続く島主と舟人の微笑ましい関係が見える。

(3) 白おこし

正月一日の夜中・二日の未明に行われ、白と杵きねに注連縄しるしなわをはり、供え物をする。

まり宴会を開いた。

本組合員の家では、朝から忙しい。必ずアズキご飯は炊く。米、焼酎、塩を持って浦神様にお参りし、公民館にあるエビス様に参る。家主は、アズキご飯等を祭壇に供えたまま帰宅する。各家では、婦人たちが酒の肴になるものを用意する。このお膳盛のことを「スズリブタ」という。

船祝いの儀式

まず歌から始まる。

「綱つなざらえ」「年の初め」「船唄」と続く。最初に歌う「鼻引き」の人の後に続いて皆が合唱する。

綱つなざらえ

米八石、餅三個、橙だいたいを一升櫛だいたいに入れ臼に入れてお供えをする。一番鶏の鳴いた後に小中学生が各家を回り、祝い文句を唱えて米をつく動作をする。祝儀として子どもたちは、餅をもらう。

(4) 正月七日 福祭文(クサイモン) 七草

小中学生が福祭文の歌を歌いながら各家を回る。祝儀として餅をもらう。その後は、自分たちで分け合う。福祭文の歌も掛け合いになっている。

福祭文の歌

(鼻引き) 祝い申す 祝い申す

イヨー これこそや候よ

イヨ 何時いつよりも今年は

イヨー 門かどの松が栄えた

イヨ 栄えたこそや候よ

イヨ 雪 豊年の年なれば

イヨー 鶴と亀とが舞いに来た

イヨ 舞に来たこそや候よ

めでたい言葉が延々と家々に響く。

(5) 一月十五日 コノミヤジョウ「蠶祝」

各家では、柳の枝に新しくついた餅を小さく切ってたくさん刺し、屋敷に飾る。

(6) 願掛け(願たて)

三月の田植えや畑仕事が終わると「トビウオ捕り」の願掛け

が行われる。

浦田神社、風本神社(現和)、住吉神社、奥神社(国上)、諏訪神社(安城)、熊野神社と手分けしてお参りに行く。

(7) 旧六月二十八日

六月燈併せてトビウオ願成就を行う。

(8) 九月二十八日 願成就

池田では、エビス神社の前で「ヤーとせー・那須の与市」調子がわり「来て見よ」が踊られる。

洲之崎では、恵比寿様の前で「どすこい・相撲取り節」が踊られる。

「どすこい」の由来



池田のやーとせー (池島勇氏提供)

慶応年間に本土の上方の人が洲之崎を訪れた際に伝えられたようである。たまたま殿様のお祝いのときであったという。その後明治末期、当時村落で赤痢が集団発生して多くの人が亡くなったときに、この踊りを踊って病気になるぬように祈り、また浦人が幸福に働けるようにと祈りを込めて踊った。以来毎年洲之崎の



洲之崎のどすこい

願成就祭りに踊られるようになった。洲之崎浦の婦人たちの心意がこもって力強くすぐれた芸になっている。

平成二十八年

(二〇一六)、滋賀県長浜市において地域伝統芸能全国大会「日本の祭りinながはま2016」が催された。この大会で洲之崎の婦人たちの優雅で勇ましい「どすこい」が長浜の町で繰り広げられた。

(9) 旧十月二十八日

総願成就併せて魚介類供養を行う。十二月に弁指の交代と併せて師走祈りを行い、三十一日に行う無事安息のお礼参りをもつて浦の一年は、終わる。

### 中原太吉の日記にみる三ヶ浦の生活

(1) 資料として

昭和十三年十二月三十一日、池田の中原太吉氏の日記を引用する。

半雨・西の風正月準備、ザコの計算をする。本年は、春磯

終わりの後、あまり生活に困ることもなく、例年に比し、良結果の年であった。これ即ちキサ



中原太吉氏 (森田俊氏提供)

(娘)が学校を終わり幾分加勢したからである。その他に弁指であり又天草の値がよかったためである。来年もどうかして漁港もよく、借金の内入れ等もするようにならないければならないと祈る。

中原太吉氏の「漁労日記」昭和二年・五年・十一年・十三年分を『資料種子島の漁撈生活中原太吉氏の日記』として川崎晃稔が編集して本にしている。

ここで、種子島の漁労生活を知る上で欠かすことのできない第一級資料である中原太吉氏の日記を紐解いてみよう。編集された川崎晃稔の文章を引用する。

太吉氏は根っからの種子島の漁師である。池田浦で生まれ、池田浦で育ち、漁撈をおこない八十年の間自分を池田浦を三ヶ浦をじっくり見つけて過ごしてこられた。毎日の忙しい生活苦しい労働の中で記された日記は、太吉氏の汗の結

第4節 歴史的特殊性

表8-3 中原太吉の日記（昭和11年6月18日～23日）

月日	天気・風	漁業	場所	仕事	経済	行事	遊び・その他
昭和十一年 六月十八日	曇 大北	○出漁 ○産卵	白小浦	○船一隻渡種 ○午後三隻渡種 ○女も連れてくる。	○春先以来の計算がある。	○本朝の渡種は不賛成の人ありて面白くなかった。 ○昨日そのように相談したので実行した。	
六月十九日	晴 北	○出漁取れず ○エバ取りに行くも取れず 空しく帰る。		○エバ網のアバ取りに松三船より渡種 ○残留はエバ網仕立てやる。			○種子は、又取れたり
六月二十日	雨 北東 海温 二十三度半			○いろいろな負け惜しみを言い残念声高く小生心身共に疲れ当浦の都合の悪いことには泣かざるを得ない。 ○種子に予備網を置く相談をして福神丸より人員を抜き渡種す ○浦見には文吉が行く。			○小港口にして他浦一千尾。 ○遼泊は、両方にて四万尾。
六月二十一日	晴 西氣 海温 二十四度	○出漁 五十六人 ○四万尾 ○一人前七百十三尾。 ○浦魚六十尾 ○小十尾 産卵す	孫浦	○本朝は当浦好結果。 ○小生は網修理。 ○塩二俵受け取る。			○福神丸塩を積んでくる。一俵受け取る。又塩積み二隻いく。 ○栄次郎方の焼酎借りる。一升に足らず。
六月二十二日	雨 西南 夕方晴 なき 海温二十四度	○出漁一万七千位 鮮魚船に売る 二十八円葉山にてわたす。	孫浦	○西南風雨なので小生等組と機械船廻す ○夕方船当港に廻す			○当浦には、わが組だけが取る
六月二十三日	雨 西南 後晴 海温 二十四・五	○出漁 二万五千尾 鮮魚船に売る 二十七円八十銭	孫浦		○大阪朝日新聞記者より焼酎二升もらう。	○神参詣 ○下向祝い盛大	○数之渡中 西南強風雨心配 ○田之脇組種子に徳吉丸より行く。

晶であり、漁民、浦、ひいては種子島の漁業の貴重な記録である。いいふるされた言葉であるが、表にあらわれて華

やかな脚光をあびている人たちによってのみ歴史が作られるのではないのである。

太吉氏の日記は単なる資料ではない。よそのものの観察でもない。その行間には漁民の苦悩と喜びが満ちあふれ読むものの心をひきつけてやまない。

太吉氏の日記は、昭和二年から一五冊が残っているが、この本には四年分が収録されている。

太吉日記の日にち・天気・漁業・場所・仕事・経済・行事・その他を全て分析してみた。ここに昭和十一年六月十八日から二十三日までの表を掲載する(表8-13)。

### (2) 中原太吉氏の日記に出てくる魚の名前

日記に記述のある魚は、次のとおりである。

イワシ、イカ、アラ、赤花(かんばち)、エバ(鰺系)、あかじょう、赤魚、アゴ、アブキ、ぐんぐー、黒魚、カツオ、  
 亀魚、鰯(ブリ)、小麦タコ(キスによく似た魚)、くちび  
 だい、小マツ、小魚、コーコダイ、コムロ、田作り、ザコ  
 (きびなご)、鯖、しょうぶ、しろだい、トビウオ、つるぶ  
 く、チン(チヌ)、ノークリ、ナガラメ、鱈(ふか)、鱈の  
 子、ヒラス、ハカマ、ハチキ、ブト、メコン、モハミ、モ  
 ジクリ、マツ、マダイ、メバル、まつふか、瀬もの(瀬で  
 捕れる魚)

種子島では、ウミガメのことを亀イオ(亀魚)という。太吉氏の日記にもたびたび出てくる。現在ウミガメは全種が絶滅の危機に瀕していて、国際自然保護連合のレッドリストに登録され、世界で保護対象とされている。すなわち現在、亀イオは捕つ

てはいけなものである。しかし種子島では、保護対象となる以前はよく食していた。亀イオが捕れると浦は賑やかになる。亀イオはさばかれて大鍋で水煮を何時間もする。肉は牛肉の様でとてもおいしい。水煮した肉を小さく切って拵で測り皆が買ってくる。また、臭みがあるので味噌やせりなど臭みの取れるものと煮ていた。

### 鯨

三ヶ浦には、鯨が捕れた話も残っている。

安政六年未二月二日下り

鯨取り方 日記

笹川九兵衛

洋上で鯨を見つけ陸上げる。月桃(シヤニン)の繊維から作られる縄は強靱で、鯨を曳航して陸揚げするのに適している。このときも舟人の力のある加勢が大きな力となった。

### 三ヶ浦の俗言

超人的な存在を信じ、それに対応する知識や技術のことを中心に、次のような俗言がある。

○船の上でマムシの話をしてはいけない。船神様が嫌う。

○帆船の頃は、ウス(口笛)を吹いてはいけない。ウスは、船神様が天気を知らせるために吹くもの。「二・三日し  
 たらしける」と言われていた。

○船神様は、女一人を乗せるのを嫌う。船神様は、女性なので嫉妬する。漁師は、現在でも船神様に艶話をして聞かせると大漁させてもらえると信じている。

○宮崎様（日向）の前で艶話をしてはいけない。

○硫黄島が頭に雲を被っていたら沖は、西の風。だから種子島も西の風になる。

○馬毛島で硫黄の匂いがしたら、ハエの風（南西の風）が来る。一・二月は用心する。

○お産の時は、産三日とって三日間は沖に出ない。

○町に死人があったら町中海に行かない。

○海の中にカネ（鉄分）を落としてはいけない。

○船には、苔茸きといって草で編んだシートのようなものを設え屋根代わりにする。大台風でもういよいよいけんというときは、苔を二つに折って船中の人のピンハツを切る。苔の上に並べ、ビンズイジョウ（びんずる様）に「無事通させて給うれ」と祈る。そして苔ごと海に投げ

て苔が返らず、髪が乗っていたら船は無事だという。

○一月十二日（十一日の夜から十二日にかけて）本源寺で通夜祈祷してもらったオセンマーを枕箱に入れて持っていく。丸木舟で一人で行くとき、恐ろしい時、難船の時撒くといい。十一日の御祈祷の時は、種子島家から刀を借りて来て本源寺に飾る。

○本源寺の側の寿木通り、昔そこは木がうっそうと茂り、

ヌレヨメジョウが出ると怖がられた。

### 遼泊 五助の墓

朝鮮の文祿の役の英雄坂口五助の墓は、川迎集落から安徳橋に向かう道の左側の集合墓地にある。五助については、『種子島家譜』に記録が残っている。文祿元年（一五九二）から始まった豊臣秀吉の朝鮮の役の際、種子島島主一六代久時は、島津義弘の軍に属して朝鮮に渡った。

慶長三年（一五九八）十一月十日知日順天城で、小西・五島・有馬・大村・松浦の五将が明の大群に囲まれて、海路退却の折、苦戦であった。種子島勢もこのときよく戦った。久時の船の船長は山縣五郎左衛門で、この船に遼泊の五助が乗っていた。五助は、鉤を使う名人であったという。五助と大勢の種子島の舟人たちは、鉤で敵船を引き寄せ乗り移り、諸軍に先立って敵船をとった。この戦いで五助は、矢に当たって戦死した。その後坂口家は、遼泊の墓地に墓を建て遼泊の舟人たちは、五助の勇敢さを



五助の墓

たたえて四〇〇年以上前のことを現在に伝えている。

### 馬毛島王籠浦の石塔

王籠浦の高台に小さな緑地があった。ここに墓石のような石塔がある。それぞれの石塔は、各々異なった形をしている。これについて確たる記録はない。しかし言い伝えとして種子島家八代清時の時の「三郎殺し」のことが伝わっていてそれに関する石塔ではないかといわれている。

平山武章著『馬毛島異聞』によると、「三郎は、家を嗣ぐ器でなかったので、群臣相議して馬毛島に狩りをするといつて三郎を連れ出し、殺したのである。年十七歳。後に善入院隆三日住居士と諡おくりなされた」とある。また池田浦の言い伝えによると、一人は高貴な人、もう一人は世話役の人、後の三人は、警護の人であるという。後年になって五人の無念の思いを供養するためにこの地に石塔を建てたのではないだろうかとも言われる。

### 池田の石垣

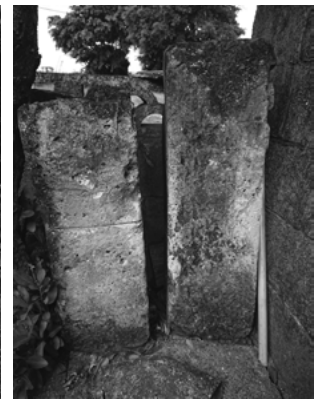
池田と東町の境に一部古い石垣が残っている。高さ一メートルぐらいで、漁村と鍛冶町（東町）を区別したものである。

### 「歌之助 歌を申せ」

藩政時代、島主が鹿児島から帰ってくる時、お召船が浦田の鼻と島間の鼻の見える沖（約一里沖）のところで帆を下す。



洲之崎エビス神社の石塔



池田エビス神社の石塔



池田の石垣

何隻もの漕ぎ船が曳航して港を目指す。漕ぎ船は、池田、洲之崎、漕泊の各浦から舟人たちが出て漕いだ。この時お召船に歌之助がいて、船頭が「歌之助 歌を申せ」と言うとその沖の所から「櫓歌」を歌いはじめる。「あーとめでたいなーうれしいなー、めでたいのイヤレーアーカー」と歌之助が歌うと皆で「枝もーいそーでー栄ゆる」…と歌い、風が強いときは速く、弱いときはゆっくり歌い、船が丁度赤尾木港（西之表港）に着くときに歌い終わるようになっていた。池田浦が「櫓歌」、洲之崎浦が「つなざらえ」、漕泊が「祝年」を歌った。

〔瀬引き、瀬落と〕〕

三ヶ浦を筆頭に舟人の活躍の場である。

『種子島家譜』によると、寛政元年（一七八九）三月二十一日、島主が帰島したときのことである。大きな網を作り、洲之崎より箱崎まで網を張り、これを棧敷の下にひいてくる。網を十重二十重にして魚を追い込む。魚鉾（オーヅキ）でついて魚を捕る。漕泊浦で古老が「最後の肴を殿様が突いた」と言い伝えてゐる。ここまでは三ヶ浦はじめ各浦々の舟人の勇ましい活躍であつた。その後日典寺の棧敷の平（現在の日典寺会館）で終日酒肴の宴が開かれた。

三 明治時代の人々の暮らし

赤尾木城下町の様子（概略）

種子島氏の居城（赤尾木城）周辺にはアコウの樹木が多く生えていたことから、城名も「赤尾木城」と呼ばれた。

最初の居城趾は、西町市街地の直上にある「本城」である。三連郭を呈する古城趾で最先端部には、望楼と思われる土塁も残る。

『種子島歴史譜写録抄一』に次のような記述がある。

元（本）城は信基よりの居城と見ゆ。されども實は六代時充初て本城の城を築き給いしと。古城趾は今渡辺氏、吉良氏この両屋敷一円の城地也といひ伝へたり。其の証拠今に残りあり。右両家書院庭石に人力及び難き大盤石を築

構え居る。外に右堺内土中に数多の大盤石埋め居る。惣じて城築立の盤石たりしと見ゆ。大手の門は西町金屋小路よりの上り立也と。其の古跡之しるし今に見ゆ。

また渡辺氏宅地の西へ高上の地あり。是を今に世人壇の上と言ひ伝ふ。是西沖海原見佳す遠見を附置れたる地也といひ伝る也。

この最先端部の崖下に商人町（西町）、南側に東町（職人町）、さらに三ヶ浦（洲之崎・池田・漕泊）が赤尾木湾を取り囲む様に配置されている。『二十人家傳記』によると西町は、種子島氏初祖信基が下向の際、船頭として随伴したと伝える五人家（二十人家）が荒地を開墾し、伐り開いて作ったと伝える町である。居城は六代時充（本城）、二代忠時（池田黒山尻）、三代恵時（屋久田）、四代時堯（坂の上）、一六代久時（石之峰・のち内城）、一七代種子島忠時（上の屋地）などと島主の交替のたびに、転々と移動している（『懐中島記』）。

しかし、江戸時代に入ると、一国一城令により、藩内の諸居城は廃止され、種子島氏の居城も覺府鶴丸城下（種子屋敷）に移り、赤尾木城は在島の家老・家臣らによって管理され、島民は鶴丸城下の種子屋敷の勤務と種子役所（旧赤尾木城）の二重生活を強いられた。

この覺府勤めを七月旅と呼び、過酷な旅であつたことが『種子島家譜』などに記されている。種子島家の統治機構は薩摩藩の外城制度に準じたもので、居城を麓土が直接守り、農村部に

は郷士を配置し、赤尾木城を外側から守らせるといふ体制をつくっていた。

### 海運業の様子（概略）

『種子島家譜』中の大型帆船に関する記事の一部から、赤尾木之津への大型船の出入りをみてみる。

寛永十一年（一六三四）

三月八日 猿渡嘉左衛門、湯地嘉兵衛、永俊尼（光久公の外祖母）を護送し来たつて、大長野（本立）に放つ。男女二十人これに従う。

同年十二月二日

忠時及び婦人至。公（太守）、船三艘を以つて之を送る。

十三反帆・十二反帆・八反帆なり。我が船四艘

この記事は江戸幕府によるキリスト教禁止令により、一九代薩摩藩主島津光久の外祖母永俊が、種子島へ配流された時の記事である。

藩主光久が「このことを適切に処遇させるために、一七代種子島忠時及び婦人を急遽、鹿兒島から種子島へ帰らせた際、薩摩藩の大型帆船三艘を出し、慶府で見送った」という内容である。この帆船二艘は三〇〇石相当（一三反帆）二艘と一〇〇石相当（八反帆）一艘の合計三艘である。武家諸法度により「大船建造禁止令」が制定され、五〇〇石積以上の大船建造が禁止されたのは、その翌年の寛永十二年（一六三五）のことである。

種子島氏の御用船は最大一六反帆といわれ、およそ三〇〇石前後であったと思われる。明治二十年頃まで行われていた琉球交易船は一一反帆程度で、一〇〇石クラスの帆船であった。

『種子島の民俗』によると、次のような報告もある。

種子島には御用船の他に、民有商船があり、その商船は赤尾木の井元家を中心であり、十六艘の私有船があり、回漕や時に島主の御用船の役目もしていた。

三ヶ浦（漁村）の役割は特に重要であった。『種子島旧浦沿革書』に「三ヶ浦人は御船（台所船）に限らず、他船といえども赤尾木港碇繋中は大風の非あるか又其の他非常の際には速やかに船手へ馳せ来り、綱取り、其の他諸般の予防を施し、遭難の害厄を免れしむ」とある。また、「御汐見と称して、三ヶ浦、輪番でその者を選び、御船手役所へ無給で勤番せしむ」とある。その任務たるや「種子島氏受封以来、十八ヶ浦が置かれ、その城下の膝元に三ヶ浦（池田・洲之崎・漣泊）が設けられ、島主家の生活や異国船の警戒及び異国船の薩摩藩山川番所までの送迎の義務が課せられた。（中略）島内に十八ヶ村があり、ここに漁民が住す。池田・洲之崎・漣泊・住吉・浦田・花之木・庄司浦・田之脇・川脇・浜津脇・大町田・岩屋口・犬城・女洲・熊野・浜田・竹崎・島間の十八ヶ浦である」とあり、その各浦の役割・漂着船への対応なども詳細に記されている。異国船の漂着は、『種子島家譜』に、島内周辺に七十数隻が記されており、さらに『天文応対記』にも「異国船漂着の際、浦人は、その場

所より小船二十数艘にて山川まで送り届ける義務」が記されていることから種子島の主要漁港には曳航可能な一〇反帆程度大型帆船が存在していたことは想像に難くない。

北種子村「営業届」にみる各町の様子

明治二十四年に発行された北種子村「営業届」は、北種子村民のあらゆる職種の課税台帳で、明治時代の農林業・商工業・漁業者らの暮らしがわかる極めて貴重な資料である。この「営業届」により、明治二十四年当時の西町・東町・漁村の暮らしぶりを解析してみる。

(一) 西町を中心とした北種子村の商業

西町の北限は慈遠寺(八坂神社)から、南限は西岸寺あたりまでで、厳密には現在のほっともつと駐車場北端に小川(側溝)があり、その川ははやしタクシーと旧サンカラの間を抜け、赤尾木湾へと注ぐ。しかし、これらの川は現在は蓋が被り、確認することはできない。古くは、この小さな川(側溝)が西町と東町の境界であったと旧市職員らの証言がある。

明治時代に入り、世襲制が崩壊すると、西町の商人の中から技術者になる者・東町の職人から西町の商人になる者など混在し始める。

表8-4、8-5で、西町(商人町)の様子

表8-5 小間物屋(雑貨屋)店舗数一覧

順位	商品	店舗数	順位	商品	店舗数
1	豆腐	66	26	洋燈	7
2	小間物*	55	28	古着	6
3	飴	51	29	塗物	6
4	果物	40	30	蠟燭	6
5	荒物*	38	31	文具	5
6	油	35	31	石油	5
7	素麺	32	33	金物	4
7	麴	32	34	米	3
9	酢	27	35	種子油	2
10	醤油	26	35	石炭	2
11	魚類	23	37	書籍	1
11	昆布	23	37	綿	1
13	紙	22	37	西洋小間物	1
14	陶器	20	37	味噌	1
15	酒類	19	37	硝子	1
16	下駄	18	37	瀬戸物	1
17	砂糖	15	37	蒟蒻	1
18	太物*	13	37	薬種	1
18	茶	13	37	着物	1
20	線香	11	37	草履	1
21	傘	10	37	銅鉄類	1
22	墨	9	37	鍋釜	1
22	麻苧*	9	37	布	1
22	附木	9	37	帽子	1
25	筆	8	37	団扇	1
26	塩	7	37	肉	1

\*小間物：荒物より小さく、細々とした針・糸などの日用品  
 \*荒物：桶、ざる、ほうきなどの類  
 \*太物：綿織物・麻織物など細織物より糸が太い織物  
 \*麻苧：麻を使った織物、麻縄など

(「営業届」明治24年)

表8-4 小売営業者中の最高売上額(一例)

第1位 田中 善兵衛	
売上額	4,050円*
商品名	太物、古着、小間物、麻苧、鍋、傘、下駄、茶、砂糖、素麺、布、線香、油類、蠟燭
第2位 田上 七之助	
売上額	3,950円
商品名	古着、太物、小間物
第3位 小山田 善次郎	
売上額	2,450円
商品名	太物、古着、小間物、筆紙、墨、傘、下駄、陶器、素麺、麻苧、鍋、洋燈、茶、砂糖、帽子塗物、金物、油類
第4位 大竹山 平蔵	
売上額	1,100円
商品名	古着、小間物、茶、砂糖、油、酢、銅鉄類、陶器、果物

(「営業届」明治24年)

を示した。各職種の具体的内容を見てみる。

小間物屋（雑貨屋）

小間物屋とは、生活用品、石油や魚類など、何でも揃っている雑貨店である。

表8-4において、記載のないその他の店舗は、売上額平均が五〇円程度で、上位四人がとび抜けて大きな商人といえる。特に上位四人に共通する商品は古着販売で、都会の古着（主に洋服）を仕入れて販売しており、和服に代わって洋服に移っていく様子がうかがえる。

古着屋の中に田上七之助の名前がみえる。田上七之助は安城出身で、安城川脇港から大阪へ行き、古着を仕入れ、赤尾木町で商売し、一代で大財産を築き、更に絶滅しかけた珍獣ウシウマの繁殖に成功したことなどで有名である。七之助はそのほかにも、西町海岸の埋め立て事業（名月食堂付近）花屋きたる店（附近迄）、現和浅川橋（風本橋）の架橋、現和川氏の七之助垣など、島内に多くの功績や逸話が残されている。

素麺はほとんどの店で販売されているが、うどんを販売している店は一軒もなく、自家製だったことがうかがえる。また、ほとんどの雑貨屋で麴が販売され、味噌・醤油は自家製造していた。

一方、秣米を売る米屋は僅か一軒である。米はもっぱら自家製か物々交換で入手していたことが推測できる。

附木とは現在のマッチのことである。松や檜の薄い木片の端

に硫黄をつけたもので、炭火などから灯火などに火を移すのに使っていた。

明治時代に入り、「寄留」という文字が増え始める。寄留とは、本来の家（土地）から離れて、他人（よそ）の家（土地）に住むことである。新しい商人や技術者たちが島外から種子島に押し寄せた。

その移住の大きな引き金になったのは、明治十九年の甌島からの集団移住である。その移住者数は全体でおよそ四〇〇〇人以上にも及ぶ。さらに大正時代、種子島・屋久島の存在を知り、種子島へ渡り、行商（座売り）を始め、成功した大阪商人もいた。

また、小間物屋の中には、鮮魚を合わせて販売している店舗が存在した。港町にふさわしい光景である。その数は、西町一四軒、東町二軒、その他一軒を数える（表8-6）。  
桶屋（タンコ屋）

桶屋一一軒のうち、四軒は島外からの移住者である（表8-7）。台風常襲地帯の種子島には桶は欠かせない必需品であった。雨漏り水を溜める水桶、トビウオを保存するトビウオ樽など、

表8-6 小間物屋の中で鮮魚を合わせて販売していた店舗

西町 (14店舗)	榎本新吉、高橋與之助、中村伸之助、池村民之助、向田新八、井元五〇、牧瀬新七、八板盛助、谷山清太郎、有留安蔵、桑原彦助、川越順一郎、大木カメ、濱田〇助、宇辰シゲ
東町 (2店舗)	山下清左衛門、時任嘉次郎
場所不明 (1店舗)	白石清兵衛

〔「営業届」明治24年〕

表8-7 桶屋（タンコ屋）（明治23年）

西町 （4店舗）	濱田覚太郎、濱田長右衛門、 濱田吉□、桑原直次郎
西町（寄留） （3店舗）	田中惣太、小林熊次郎、竹迫傳吉
東町 （2店舗）	丸岡甚太郎、鮫島竜之助（同居）
横山 （1店舗）	長野三次郎
不明 （1店舗）	岩坪太右衛門

表8-8 紺屋（明治23年）

西町 （2店舗）	牧瀬十左衛門（紺屋職 甕2個） 池村善七（染物兼紺屋職 甕6個）
西町（伊作寄留） （1店舗）	田中袈裟市（染物兼紺屋 甕6個）
東町 （2店舗）	牧瀬傳之丞（染物兼紺屋 甕5個） 濱田新次郎（甕3個）

表8-9 傘屋・提灯屋（明治23年）

傘職 （2店舗）	松下新次郎 松下嘉助
提灯屋 （1店舗）	松下嘉平次

種子島に暮らすうえでタンコ（桶）は必要不可欠なものであった。

特に飛魚樽（直径及び高さ一・四寸程度）が漁村の倉庫にはいくつも保管され、トビウオ漁の季節になると馬毛島に持ち込み、トビウオを塩漬けにして種子島へ運んだ。

桶屋は「阿多地方のタンコ」が有名である。寄留者の四軒は阿多地方（吹上・金峰）からの人々である。

### 紺屋

藍染めを行う染物屋を紺屋と呼んだ。のちに染物屋を広義的に紺屋と呼んだ。紺屋の大きさは甕の数で決まる。

紺屋の作業場には大きな甕が埋められていた。昭和四十八年、本市は、住吉深川上妻家の「紺屋の型紙、紺屋の職人の帽子」を収集した（鉄砲館所蔵）。その際、故上妻宗安氏は、「江戸時代の自家に伝わる紺屋の型紙と帽子だ」と言い、提供した。明治時代、赤尾木の町にも五軒の染物兼紺屋が存在しており、島内の大字各地にも紺屋が存在していた（表8-8）。大字地域に現在も「コーヤ」と呼ばれている場所が多いのはそのためである。

### 傘屋・提灯屋

日本で発達した紙張りの傘は、和傘（唐傘）と呼ばれ、布地を張ったものは、洋傘と称された。洋傘は一般的にコウモリ傘と呼ばれた。明治時代に入り、上流社会ではコウモリ傘（洋傘）が流行するが、庶民の大部分は和傘で、これは戦後まで続いた。武士の内職として存在した傘屋が明治時代になっても名残りを留めていたことが見える。さらに、傘屋と同じ松下一族による提灯屋が一軒ある（表8-9）。提灯屋も明治時代に入り、漸次、姿を消していった。

### 回漕業

明治時代に入ると、藩政時代（二十人家）の船頭集団の名前は消え、三ヶ浦（洲之崎・池田・漕泊）及び住吉浦の漁民・新規参入者の人々を中心となった。さらに使用船番号⑬⑭⑮（表8-10）は大型船から、積荷を運ぶための「団平船」である。

三ヶ浦の回漕業の使用船は洲之崎の古市甚七氏の一四一石積

表8-10 回漕業 (明治23年)

地区	使用船番号	名前	積載量
西町	3	新原次助	125石積
	4	山縣平兵衛	108石積
	10	原田喜次郎	66石積
	13	八板覚之助	長さ4間
	15	桑山平七	長さ2間
洲之崎	1	古市甚七	141石積
	2	行船仲次郎	129石積
	7	後庵弥市	80石積
	9	行船仙左衛門	68石積
池田	5	池嶋新次	83石積
	12	富貴田万太郎	55石積
湊泊	6	船元嘉吉	83石積
東町	8	中山徳太郎	72石積
住吉	11	上田庄七	63石積
寄留	14	坂元太右衛門	長さ2間

いる。琉球交易の盛行した江戸時代には、島間浦でも大船の存在が報告されている(近畿大学民俗学研究所編『民俗文化二一』)。

また天保二年(一八三一)、琉球交易に従事していた村松休次郎の二三反帆船が琉球国司から大清国(中国)への公儀物を積載して薩摩国へ運送をしていることがわかる古文書がある(「村松文書」)。このことから種子島の民有船は二〇〜三〇反帆程度の大船で琉球交易を営んでいたことがわかる。

琉球交易拠点であった現和庄司浦港(北種子村)や島間港(南種子村)や浜津脇港(中種子村)にも、これら相当の回漕業者がいたと考えられる。

が最大で、先述の島間船などと同程度二本柱一一反帆強と思われる。一〇〇石以上が四艘、一〇〇石未満クラスは八反帆程度であろう。三ヶ浦各浦に六〇〜八〇石程度の回漕業者が存在して

表8-12 漁村での商業の状況 (明治23年)

漁師の内容	
漁網により漁をする専業漁家	18人
網子漁 網漁に乗組む人々	13人
釣り漁 船を有して、釣りを専業	3人
*使用船の大きさは一間、極めて小舟	

網漁者の売上金額 (上位者)	
第1位	130円 中島甚助 (洲之助)
第2位	126円 岩坪万助 (湊泊)
第3位	116円 徳浦太市 (池田)

網子漁業者 (13人)	
磯辺三次郎、行船仲吉、磯辺喜次郎、碓文蔵、川崎末吉、池浪周助、川崎仙次郎、湊川長次郎、坂中與吉、坂中伸次、濱脇與助、坂口嘉造、塩崎泰助	

釣り漁師 三人	
池浦政吉 (池田)	使用船 一間
行船仲吉	使用船 一間
後庵弥太郎 (洲之崎)	使用船 一間

\*「営業届」には、漁獲物には不課税、但し使用船に課税と記されている。

その他  
その他の商業は、表8-11のとおりである。米屋が少ないのは、自給自足・物々交換など配給制度によるものであろう。

商店数  
これまでみてきた商店数をまとめると、表8-12のとおりとなる。

(2) 漁村のようす (三ヶ浦及び住吉浦)  
漁村での商業の状況は表8-13のとおりである。

表8-11 その他の商業 (明治23年)

業種	名前	備考
旅人宿 (旅館)	坂元太右衛門 (寄留)	宿泊実績: 516人 / 年
	荒木平助	宿泊実績: 453人 / 年
社職 (米屋)	柳田覚蔵	
古着行商	相良椋太郎 (西町)	(大竹山平蔵雇人)
	廣瀬ウメ (西町)	
売薬業 (薬局)	山縣平兵衛 (西町)	
	市来庄蔵 (東町)	
	高崎能昌 (西町)	
印判・彫刻	高崎能昌 (西町)	

表8-13 北種子村の商店数

業種	商店数
薬屋	1
古着屋	1
提灯屋	1
米屋(タイ米)	1
ろうそく販売	1
ろうそく製造	1
魚屋	2
旅人宿	2
傘屋	2
紺屋	5
タンコ屋	11
回漕業	15
小間物屋	91

(「営業届」明治24年)

(3) 東町(職人町)について

東町は鍛冶屋(鉄)・大工・畳屋・左官・鑄掛屋・ブリキ屋などの職人町である。

口碑には次のように記されている。

種子島の鍛冶の起源は古く、鎌倉時代、六代時充(初代信基とも)が種子島へ入島時、鍛冶技術者を随伴し、南種子下中の七ツヶ森(真所神社の後背部)に居住させ、鍛冶屋は鹿鳴川の周辺に居住させた。その後、島主が赤尾木へ移動したことで、鍛冶集団も赤尾木町(石原)というところを切り拓いて居住した。その場所(玉川周辺)は石が多く、のちに田んぼになった。

種子島の鍛冶集団は刀鍛冶(八板・牧瀬(石原)・石原)に起源を發し、江戸時代に入り、柳田・阿世知へと拡大し、「黒山五十軒」の鉄砲鍛冶が軒を連ね、終日、槌音が絶えなかったという。東町は鉄砲伝来地の鍛冶屋町として盛行するが、鉄砲の需要が増すにつれ、刀鍛冶は姿を細め、鉄砲鍛冶が主流となつ

表8-14 東町の鍛冶職(明治23年)

鍛冶職(27軒)	
鉄鍛冶(22軒)	桑原仙太郎、柳田犬次郎、平瀬新太郎、村松栄五郎、柳田傳吉、牧瀬傳吉、平瀬直藏、牧瀬休五郎、平瀬友助、笹川流石、阿世知源吉、宇辰茂助、阿世知友市、平瀬孫七、阿世知文藏、平瀬新太郎、柳田安太郎、平瀬友八、大山五平衛、柳田休助、吉留市十郎、和氣謙一郎 *各鍛冶屋は最低二人~三人の家内工業である
薄鉄業細工(寄留) 鑄掛織(寄留) ブリキ職(寄留) (5軒)	瀬戸口清太郎(薄鉄業細工) 白石嘉兵衛(鑄掛職) 時任嘉次郎(鑄掛職) 安藤亀太郎(鑄掛職) 倉本熊太郎(ブリキ職)

ていく。

しかし、名刀工「国命」や名鑄師なども輩出している歴史は特記しておかねばならない。

その後、鉄砲鍛冶は銃身を作る鉄砲鍛冶、さらに台座を作る台巧(大工)、さらに付属品を作る金具師へと分業化が図られる。東町の金細工師は西町の「金屋の小路」へ移住し、今日、その呼称だけは伝えられている。

鍛冶職

赤尾木城下の鍛冶は、刀・鉄砲の製作が主流であったが、時代の変遷に伴って、脇細工であった種子鉄が主流となっていく。さらに、明治時代に入ると、薄鉄業細工職人、鑄掛職人、ブリキ職人などの

新しい技術者が来島した。また、これとは別に、野鍛冶の歴史もある。野鍛冶は農具・包丁・鍋釜など生活に密着した農機具の製作である。特記すると、中種子町野



図8-6 鍛冶町のうつりかわり  
(大正時代)



図8-5 鍛冶町のうつりかわり  
(明治時代)

間で製鉄された「野間鉄」は農機具用に珍重され、中種子町立歴史民俗資料館にその製品が多数保存されている。

#### 大工職・左官

大工職・左官職は表8-15のとおりである。

#### その他

その他の職業は、表8-16のとおりである。

昼職は、榕城校区・上西校区・下西校区に集中していた。また、種子島の瓦製造の起源は古く、一七〇〇年代とされ、全国でもその古さは第三位と記されている（近畿大学民俗学研究所編『民俗文化二一』）。

#### 職人の数

明治二十年代の職人数は、表8-17のとおりである。

第4節 歴史的特殊性

表8-17 北種子村の職人数  
(明治20年代)

職 種	軒数
鉄鍛冶職	22
大 工 職	21
木 挽 職	11
樟 脳 職	8
畳 職	6
左 官 職	6
瓦 職	4
鑄 掛 職	3
生蠟小売	1
蠟絞り職	1
薄鉄葉細工師	1
ブリキ職	1
印判・彫刻	1

表8-16 その他の職業

木挽織 (11人)	
地区	名前
西町	上野金左衛門
東町	鮫島友助
川迎	牧瀬休左衛門
	川迎兵助
	神村休造□
中西	宮上周右衛門
	宮村儀右衛門
本立	立本清助
不明	榎本喜助
	榎本善右衛門
	阿世知清藏

畳織 (6人)	
地区	名前
西町	徳永嘉吉
中西	原口善七
	永田新市
池田	碓 休助
下西瀬泊	尾野惣助
上西	成水市藏

瓦職 (釜吉個) (4人)	
地区	名前
不明	鮫島小源次
	吉山庄吉
	桑山直次
	鮫島新藏

樟脳織 (8人)	
地区	名前
川迎	柳田清吉
	遠藤仙造
櫛之峯	石坂六之丞
横山	榎本覚之丞
	長野□兵衛
	坂元嘉十
	森山吉次郎
東町	中村善吉

生蠟小売 (1人)	
地区	名前
西町寄留	田中善兵衛

蠟絞り職 (1人)	
地区	名前
中西	中目平太郎

表8-15 左官職・大工職

左官職 (6人)	
地区	名前
西町	桑原次平太
	桑原仙次郎
寄留	植原喜次郎
東町	村松喜太郎
上西	川口太助
川迎	神屋敷次郎

大工職 (21人)	
地区	名前
西町	桑山貞七
	榎本興十郎
	桑原辰次郎
	三好清次郎
	濱田吉次郎
	桑原徳藏
	武田彌七
宇辰源六	
東町	柳田助左衛門
	柳田礼次郎
	牧瀬平五郎
	徳永利助
	阿世知半次
田屋敷	池亀喜助
	武田市郎次
田屋敷	高尾野福馬
瀬泊	岩坪宗太郎
	岩坪猪之助
上西	鶴永友次郎
不明	牧瀬庄右衛門
	阿世知市左衛門

\*上記の中で、柳田姓・牧瀬姓・阿世知姓、宇辰姓、池亀姓は、鉄砲鍛冶家系から派生した大工職である。

(「営業届」明治24年)

## 第五節 移住

榕城校区には、明治期の山川や甌島の飢饉、大正三年（一九一四）の桜島大爆発時の移住により誕生した集落がある。時代ごとにならべると、次のようになる。

山川からの移住 明治十七年

岳之田

甌島からの移住 明治十九～二十年 本立、今年川

桜島からの移住 大正三年

竹鶴、桃園

## 一 山川からの移住

岳之田は、明治十七年（一八八四）に山川からの移住者により開拓された集落である。

明治十七年八月 山川

港は大飢饉に見舞われた。たまたま山川港に訪れた種子島の河内覚右衛門は、その悲惨な状況を見て大いにあわれみ、まづ松木甚助、南幸助に移住を勧めた。兩人は大いに喜び、岳之田に移住した。土地は獄ノ田と称し、



岳之田移住徳碑

河内氏の所有で、もともとこの地に住民はいなかった。その後、山川から四家族が入植し、六世帯になった。明治三十五年（一八七〇）に道（西之表、野間線）が開設されると南種子から五家族が移住して、計一―世帯で集落を構成した。その後も、桜島や甌島などから入植を受け入れ、昭和五十九年（一九八四）では、五三世帯・一四三人の集落となった。

令和四年（二〇二二）九月現在では、五二世帯・九六人となっている。

## 二 甌島からの移住

薩摩半島西方約三〇キロメの東シナ海に浮かぶ甌島は平地が少なく、起伏の激しい地形、土地は痩せて数年に一度しか耕作できないう切替畑が多いという状況で、当時の住民は半農半漁の生活を送っていた。明治十六年には虫害、同十七・十八年には連続して猛烈な台風襲われ、甌島は大飢饉となり、ついに住民は、移住を願うことになった。

当時の鹿児島県令は、明治十九年から三年かけて甌島住民六〇〇戸を種子島に移住させる計画を立て、国に財政支援を願い出た。明治十九・二十年と実施され、その結果、種子島各地に四二八戸が入植した。

本立石堂には、はじめ数戸が移住した。島内出身者も多少はいた。

今年川には明治十九年、甌島から四戸が移住した。最初の四



桃園公民館



今年川公民館

戸は、江口・森・石崎・小川の四氏であった。これをきっかけに福岡などからも次々と移住し、現在の集落ができあがった。

### 三 桜島からの移住

大正三年一月十二日の桜島大噴火により、罹災者となった人たちが種子島に多く移住した。その大部分は中割校区・国上校区で、竹鶴には、同年三月、罹災住民一三戸、六八人が入植した。桃園には三〇戸、二〇七人が入植、元から住んでいる人たちと協力して、新しく桃園集落ができた。

## 第六節 戦争と疎開

昭和十六年（一九四一）十二月八日に日本軍が真珠湾（ハワイ）の米軍艦隊を襲撃し、太平洋戦争が開戦した。

榕城校区は市街地を形成しており、行政・商業・工業の中心地であることから、ほかの校区に比べ大きな被害を受けた。

『西之表市百年史』によると、西之表町は、昭和二十年三月十八日に最初の空襲を受け、翌日から島内全学校で一年間授業停止措置がとられた。また、県の出先機関や警察署は、近くの防空壕で執務するに至った。小規模の銃撃は連日のごとく行われ、終戦までに、全壊全焼二百六十余棟という、本市街地は惨憺たる被害状況であった。

本市街地を米軍機が通過した回数と自身の防空壕への退避回数について、当時の郵便局長重久氏が記録している。

それによると、七月三十一日は米軍通過回数が一七回、退避回数が八回、八月一日から十三日までの通過回数は計一九九回、退避回数は計一〇一回であった。

また、重久氏の日誌によると、島内の通信事情が極端に悪かったことがわかる。当時は昼間の送電はなかった。

島内の電力は木炭による発電で規模が小さく電圧が低いので光力はラジオよりも弱い状況で新聞どころか字もかきえない暗さでラジオなど思いもよらぬところである。

従って島内には電気式なラジオはまだ何処にも設備され

ておらずわずかに局長室に設備した電池式のラジオが島内唯一の情報提供機として私の記録する局前の放送掲示板は時局の動きを知る唯一の指針となっているのである。

昭和二十年五月二十日以來新聞も届かず、ラジオのニュース以外に情報を入手するすべがなかった。六月十日以降は郵便船の往来もなく、鹿児島との連絡船も次々に撃沈、座礁が相次ぎ、汽船から木帆船に、昼の運行は夜間に、そして深夜にのびて、従来八時間の行程は三日もかかるといふ窮屈な航海に追い込まれた。やがてこの航海も一週間おき、一〇日おき、また不定期となつて最後に残つた軍用船も全く動きが取れない状態となつた。

内地との通信は、郵便船も途絶し、有線（海底電線）も断線し、唯一無線電信があるのみであった。それも電源（電池）や機器のトラブルで連絡は困難を極めた。島民は暗黒と不安の中に包まれた。

考えてみれば近くに設備された高射砲から一発の銃声を聞くでもなく、又島内の航空基地から一機の友軍機が飛び出すでもなく、島内に駐屯している一個師団の兵は日夜壕の作業に日も足りない有様で戦局は目に見えて日に日に不利な情勢に追い込まれてゆくばかりのようである。

したがって終戦時にいわゆる「玉音放送」を直接聞いた島民はほとんどいなかった。

昭和二十年四月、「学童集団疎開強化要綱」が出たこともあり、

全島の小学校児童二年生から六年生までを対象として全員が、県北の穀倉地帯である伊佐・大口方面への疎開を開始した。

疎開先へは西之表港から乗船、敵の襲撃を避けるため、夜中に出港した。しかし、予定の日には出港できないこともあった。また、出港できても、大荒れの海を船底にぎゅうぎゅう詰めに乗せられ、船酔いや父母を呼ぶ泣き声がとびかう中、八時間もかかって鹿児島市へ到着、そこから貨物列車で疎開先へ向かった。『西之表市百年史』によると、榕城小学校の児童計八六〇人は、大口校・大口東校・牛尾校に分かれて疎開した。

疎開先では一言では表せない難儀な生活を送つた。昭和二十年八月十五日に終戦となつたが、すぐには島に帰る船がなく、疎開児童の帰島が叶つたのは十月になつてからであった。同年十月一日より順次、疎開学童の帰島が始まつた。

なお、戦時中の学童疎開を機縁として、本市は昭和三十七年十一月十日に、大口市及び菱刈町と姉妹都市盟約を締結し、交流を続けている。

## 第七節 人物

榕城校区は、種子島聖人と呼ばれ種子島を文化の島・学問の島に築き上げた前田豊山（榕城小学校初代校長）、「天声人語」の名付け親であり、大正初めには宮内省で勅語や詔書を書いた西村天囚など多くの偉人・賢人を輩出している。柳田桃太郎著『種子島の人』などを参考に、彼らの事績を以下に紹介する。

### 檜原孫之助長之（榕園）（一八三四―一八八〇）

西町生まれ。もともと二十家であった。私塾で寺子屋式教育を行った。赤尾木神社の神職となる。『種子島家譜』『熊毛集』の編集に携わる。

### 大木ウメ（一八九〇―一九六五）

西町生まれ。ウメ一三歳の時、母を失い、二人の弟と病気の父の看護をしながら一家の大黒柱として働いた。一家は貧しいながらも楽しく暮らしていつしか大評判となり、知事名で徳行が表彰された。家計は厳しく、ウメは餅をついて売ることになり、前田豊山はこれを「孝行餅」と命名し、「孝行茶屋」と自ら大書した看板を贈った。

吉留伝平（生没年不詳、安永から天明・寛政にかけての頃）東町の人。『種子島家譜』には、天明二年（一七八二）八月

二十九日「官 吉留伝平に米四石を賜ふ。母に事へて孝あり、且つ甲女川に橋かけ往来に便するを賞してなり」と記されている。伝平は高齢の母を、人間本来の自然の情から直心を尽くし、孝養に励んだ。

### 柳田来鳳（玉川・柳温）（生没年不詳）

東町（黒山尻）生まれ。天保の頃から文久の頃にかけて、優れた芸能を自由奔放に發揮した。鍛冶の養子となった来鳳は、その性格は磊落で、芸事は天才的でこれに関する本を読みあさり、ひたすら好きなことに熱中したのであらゆる芸事に通じ、中でも書画は特に優れ、世の人は争って揮毫を求めたという。更に、彫刻・花道・芝居・能楽など一流に達し、力作が多く、また逸話も多く残っている。

### 鮫島和七郎（一八四二―一八八六）

野首生まれ。私財を投じ、サトウキビから白下糖を製する技術の研究に没頭し、自宅内に県委嘱の白下糖改良試験場を設置し、伝習生を育てた。サトウキビ汁を搾るのに必要な木車を石車に改良した。

### 羽生六郎左衛門道潔（一七六八―一八四五）

松島（本城）生まれ。人よりずば抜けて非凡、幼き頃から多くの本を読破、文辞にとらわれず内容を理解し博学で、しかも



羽生道潔先生養蚕碑

文筆家、弓も学び、文武両道の達人であった。鹿児島で生花の道と茶の湯の法を学び、文化六年（一八〇九）四一歳の時、華道丸田流の指南免状を得た。これが種子島において、華道の先駆となるものである。四九歳の時、島主の命を受け、『種子島家年中行事』を編集した。初めて種子島に養蚕業を伝え、私財を投じ、徹底的に奨励した。

文筆家、弓も学び、文武両道の達人であった。鹿児島で生花の道と茶の湯の法を学び、文化六年（一八〇九）四一歳の

家である田上家の養子となった。向学心が強く、和漢両用の学を修め、郷土の文化・教育・勸農などに、幅広く活動した。『種子島家譜』の第三次編集に携わった。

#### 渡邊勘右衛門直（竹亭）（一七九五—一八三六）

松島（本城）生まれ。頭脳明晰で農商に通じ、また、文人としての天分も豊富で幼き頃から読書好きであった。二四歳のとき、大会寺の寺社奉行となり、二七歳の若さで法令の書を城中広間で講義し、二年後には講釈人を命じられ、講師格となった。赤字に苦しむ家政のために藩に製糖の許可を願い出て、文政十年に藩から許可され、これ以降正式に種子島で、甘蔗栽培と製糖が開始された。また、優れた製蠟法を島に紹介した。

#### 田上助市（青山）（一八〇三—没年不詳）

松島生まれ。田上義福の子で、幼い頃から家学で和漢の学を修め、更に和学を志し京都へ遊学、父を凌ぐうんちくを傾け帰京、父の賛意を得て私塾を開き、いち早く親子で郷土の教育に尽くした。五四歳の時、講談役、学校教師、七三歳で女学校校長となり、女子教育に専念した。

#### 吉良太郎氏章（一八二四—一八七六）

松島生まれ。講談役、波止築方検者、軍役方を務めた。教育の永続功労賞を受けた。第七十三郷校の初代学頭となる。

#### 美座六兵衛時観（一七七八—没年不詳）

松島の生まれ。薩摩藩の和歌師範家の谷山純清に学び、これの妙義を究め、歌会などの方式も会得し、初めて本島において和歌の師範家となり、本格的に啓発指導にあたった。これが、幕末から明治にかけて種子島が和歌の文芸が盛んになった直接の要因となった。

#### 田上市郎義福（一七七三—一八五三）

松島の生まれ。吉良松村氏房の三男として生まれ、母方の実

羽生慎翁道則（一八二六—一九〇二）

松島（本城）生まれ。祖父羽生道潔、父道貫の影響を受け、華道に専念した。四三歳の時、京都へ遊学し、茶道、華道を本格的に学び、帰島後、池之坊正流を初めてこの島に伝えた。この後、島の華道は丸田流から池之坊正流へ一変した。梅陰亭月窓と号した。大日本池之坊総会頭兼華道教授また東京出張所長となった。現在の赤尾木城文化伝承館「月窓亭」の建物は慎翁が建てた。

鶴女（武田つる）（一八四五—一八八六）

野首の生まれ。松島の武田家に嫁する。西南の役の際、夫惟信は、種子島私学校党の人々とこれに従軍したが武運なく、肥後の地で戦死した。数ヵ月後これを知った強気の鶴女は、一時悲嘆にくれたが、せめてその遺骨を先祖墳墓の地に迎えようと周囲の注意も聞かず、幼児四人を実家に預け、生後六ヵ月の乳児を背負い、勇躍熊本の本古戦場へ船出した。執念が天に通じてか、数多くの死がいの中から手織りの縞の布子を手がかりに、遂に夫を見つけ出し島に持ち帰り、埋葬して初志を果たした。

羽生俊助（一八六四—没年不詳）

松島（本城）生まれ。羽生慎翁の子。一二歳の時から第七十三郷校へ通い、公立種子島準中学校で一八歳まで指導を受け、鹿兒島で漢学を学び、上京し陸軍士官学校へ入学した。二四歳

で陸士卒業、陸軍歩兵少尉となり各地を回った。明治二十七年（一八九四）、日清戦役に動員され、翌二十八年に出征した。同三十七年、日露戦役に出征した。四六歳の時、陸軍大佐、第五連隊長の要職につき、六〇歳で退役した。

遠藤家治（一八八七—一九六八）

松島（後松島）生まれ。一五歳で小学校高等科を卒業、更に上級に進学しようと私立種子島学校で国語・漢文・数学・英語を学び、その才能を発揮、勇躍上京し、日本中学へ編入学した。夢は医学を修め、郷土の医療に尽くすことにあつたため、卒業すると長崎医学専門学校へ入学した。家は、帰農武士とはいえず裕福でなく、苦学を余儀なくされた。二五歳で卒業し、二六歳で医師の免状を受けた。大正五年（一九一六）二九歳の時、郷里西之表野首のトンギョウに開業し、同七年に市街地中心部（現在の熊毛支庁下、遠藤家住宅）へ移転した。苦勞をしたためか感激性の強い反面、あらゆる弱者にもろく、慈愛の人となり、貧しい家庭には、どんな遠方までも無料で往診を続け、特に母子家庭などからは薬代を受けとらず、薬代といって野菜や果物などが届けられると目に涙して深謝した。医は仁術の好例といえる。

羽生操（一八九一—一九七六）

松島生まれ。明治三十八年榕城の高等科三年を修了後、四十

三年、第一鹿児島中学校を卒業。国上小学校や榕城小学校代用教員として勤めた。四十四年、鹿児島第七高等学校へ入学したが病気により退学、郷里で静養した。大正七年、上京し、博文館へ入社した。この時二七歳。十一年から日本女子高等学院の教授として国文学を担当。昭和三年（一九二八）、三七歳の時、萬朝報の特派員となり、欧州に滞在。商工省貿易局編纂図書資料調査のため、十年から東南アジア、米国などに出張。先進諸国から得た収穫は大きく、広い視野から文芸は勿論、語学、その他の研究を続け、国際的な知識人としての教養が積まれた。多くの著書がある。榕城・安城・住吉の各小学校、旧種子島実業高校、旧県立種子島高等女学校、旧県立種子島農林学校の校歌を作詞した。

#### 浜田正之丞（生没年不詳）

西之表中目（松下）の人。明治三十一年一月、中西の共立夜学舎の指導員となり、二十三年にわたり集落の子弟の教育に励んだ。

#### 前田新五兵衛宗誠（中洲）（一八〇七—一八七二）

西之表中目の人。前田宗恭（紫洲）の実弟で、豊山の叔父。文政八年、一八歳の時、番頭となった。船奉行、寺社奉行、用人となり政務全般にわたって活動することになり、馬追いなどにも参加した。五三歳の時、西之表港波止築方掛となって総指

揮をとり、二年後、難工事を成し遂げた。

#### 平山優子（一八〇九—一八九四）

西之表中目松下の生まれ。家老である父前田宗周むねたかの名家に育ち、幼き頃から家学を受け、また好学であったから経書やわが国の古文書をよく読み、和漢の歴史にも精通していた。詩文に優れた平山西海に嫁いだ。この夫婦には一男（寛蔵）一女（浅子）が生まれた。浅子は中目大園の西村城之助に嫁ぎ、二人の男児に恵まれたが、その長子がよく世に知られている西村天囚で、優子はその祖母にあたり、天囚の幼少時代、その養育に尽くした。優子は和歌に優れていて、歌友に山田歌子がおおり、互いに切磋琢磨した。

#### 子島猪右衛門時廉（山水）（一八〇九—一八九三）

西之表中目生まれ。本島俳諧の開拓者である。天保六年、鹿児島の子島邸の納戸奉行として在任中、伊地知馬翁の門に遊び俳諧を学び、この奥義を究め、俳名を山水四楽庵と称した。婦島後、「東雲社」を創立して島の人たちに俳諧を指導した。以前から個人的に句作を行う人はあったらしいが、こうして指導するようになったのはこれが始まりであった。これにより、島での俳句が盛んになり、全国に名をなす俳人を輩出した。



豊山前田先生紀徳碑

前田讓蔵宗成（豊山ほうざん）

（一八三二—一九二二）

西之表中目の豊山てんにやま生

まれ。父は前田紫洲。性格は温厚しかも素直、七歳の頃早くも四書や孝經の素読をした。幕末の激動期に幼君久尚公の養育

や改革方掛として家政の確立に尽力した。明治新政に至ると、版籍奉還に

よる主従の離別も無事落ち着かせた。また西南の役に際しては、大義名分により島民の善導、旧島主の擁護に尽くした。平和に至ると、教育に余念がなく、旧主家へ誠の限りを尽くした。西村天囚とともに種子島家の授爵に尽力した。種子島に住んで島を愛し、島民の教育に生涯をかけ、学校運営にお金のない時は自分の俸給を全部投げ出すなど、失明するまで尽力したことから「種子島聖人」と呼ばれ、いまでも景仰されている。大正十二年、榕城小学校の校庭に紀徳碑が建立された。

羽生助吉能安（小磔）（一八三一—一九〇五）

西之表中目生まれ。和歌を好み、また書画も上手であった。

後に俳句も好み、晩年には、蕉風明倫教会から宗匠に列せられ、俳名を「蝸牛舎小磔」と称した。種子島において宗匠の榮譽は彼が初めてで、本人の喜びはもちろん、東雲社同人の喜びは一方ならず、俳諧熱は一層高揚し、ますます句詠にいそしんだので、歌道とともに、種子島文壇は全国水準を超え、文芸の島と世に知られるようになった。

大牟礼時春（南島、南塘）（一八七六—一九三六）

西之表中目の松下生まれ。東京美術学校の洋画家の専科に入學し、黒田清輝に師事した。第二回卒業生。明治末、鹿児島へ帰り、中央の最新流行の画風を広めた。本県洋画界の草創的役割を果たした。代表的な作品に、桜島爆発の絵、西郷南洲の肖像画、このほか、種子島聖人といわれた前田豊山、西村天囚の祖母にあたる平山優子の肖像画もある。

尾形直十（一八六三—一八九五）

西之表中目生まれ。第七十三郷校を卒業、種子島準中学校に學んで上京、東京小石川の同人社へ入學し、明治十七年に二一歳で卒業した。父の意志に従い、陸軍省へ奉職したが、しばらくすると日進月歩の風潮が著しく、外来文化の吸収にあくせくする時代となった。先進諸国を正しく知るためまず語学の普及が必要と考え、陸軍省を退職。二五歳のとき鹿児島市に私立英和学校を開設し、自ら校主となって英語の指導にあたった。後



天因先生誕生之地の碑

に鹿児島市の高等中学造士館の英語教師となり、しばらくして私立種子島学校の英語教師となった。不幸にも三二歳の若さで他界した。

#### 西村時彦（天因・碩園）

（一八六五—一九一四）

西之表中目の大園生まれ。幼少時代、父と親交が深かった前田豊山に託さ

れ、漢学の手ほどきを受けた。第七十三郷校、種子島準中学校で豊山の王道教育を受けた。一五歳で上京し、明治十六年に東京帝国大学古典講習科に入学した。一時、放とう時代へ入るも、二二歳の時、処女作「屑屋の籠」を出版。明治二十三年、大阪朝日編集局員となり、同二十九年、東京朝日新聞の主筆に転じた。同三十二年、執筆中の『南島偉功伝』を脱稿した。大正八年、五四歳の時、朝日新聞社を退社。翌年、博士会の推薦で文学博士の学位が授与された。

#### 子島勇之助（西坡・時世・荷堂）（一八六五—一九四五）

西之表中目の小田生まれ。俳号は西坡、和歌は時世、また、

書は荷堂と号した。種子島における俳諧の開拓者ともいべき祖父子島山水に幼少から俳諧を学び、また、鹿児島島の伊地知馬駒にも師事、さらに、東雲社の実力者羽生小磔の指導も受けた。小磔の没後、東雲社の中心となって明治三十九年、四一歳の時、同人らと協議し、例会の会場となる本源寺の庭前に芭蕉塚を建立した。昭和七年、六七歳の時、古池教会（東京）から宗匠に列せられ、雅号を「容膝庵西坡」と贈られた。

#### 林 幸 光（一八九九—一九八二）

福岡県久留米市生まれ。地元の小学校を出て明治四十五年、家族の移住に伴い、西之表中目で育つ。榕城小学校高等科に転校し、少年時代を島で過ごした。のち鹿児島師範学校に入学し、卒業後に県内の尋常高等小学校に勤務した。大正十一年、東京音楽学校に入学し、卒業後は群馬、大阪の師範学校に勤め、文部省嘱託で欧米の音楽教育事情を視察し、満州国政府民生部編審官となった。戦後、相愛女子専門学校教授、東京高等学校講師を経て、鹿児島大学教育学部教授、同大附属中学校長、鹿児島短大教授、音楽科長を勤め、鹿児島県の音楽教育の向上発展のために尽力した。榕城・住吉・上西・安城・古田の各小学校や榕城、住吉、現和の各旧中学校、旧種子島高校、旧種子島実業高校等の校歌を作曲した。「歌劇種子島若狭物語」の原作者である。

木村雅信（一九四一—二〇二一）

中国河北省に生まれ、西之表中目で育つ。種子島高等学校から東京芸術大学、大学院で学び、昭和四十五年修了。札幌大谷短期大学選任講師、助教授、教授、札幌大谷大学音楽学部教授を歴任し、同四十八年にモスクワ国際バレエコンクール最優秀伴奏ピアニスト賞を受賞した。西之表市市制三〇周年記念で制定された「西之表市民の歌」など多数の楽曲を作曲した。種子島を愛し、帰郷のたびに市民にピアノ演奏を披露した。

平山伝一郎武世（西海）（二七七四—一八四七）

小牧生まれ。早くから詩書を愛した。当時盛んな漢詩をよくし、その鋭さは常に衆を抜いていた。二七歳の時、京都へ遊学し、自作の詩篇をまとめた詩集『漫遊詩稿』が好評を博し、一躍有名になった。三〇歳の時帰島し、以降、長い間、島政と文教面で大活躍した。島の発展はまず人づくりが第一と考え、本藩にならない、「社（郷中）」をつくり、若者に学問と武芸を奨励した。六つの方限（地域）に共立社を設け、指導した。二度家老座に任じられているが、政治的功労よりむしろ文文学者として知られ、「西海先生」として有名であった。

知覧才兵衛行寛（一七七五—一八四〇）

小牧生まれ。農商に通じ、文化・文政・天保年間にかけて、二二代島主久柄（後の久照）、二三代久道、その名跡松寿院の

時代、鹿児島種子島邸の家老として三六年間、経営百端、特に糖業の許可を得て、家政安定の基礎づくりを果たし、また、史官として家譜の改訂追補にも貢献した功労者である。

平山寛蔵武肅（椒垣）（一八三三—一九〇八）

小牧生まれ。父は傳一郎武世（西海）、母は優子で、その長男である。才知鋭く、家学により詩歌文章をよくし、当代随一といわれ、また、利財に長じていた。嘉永五年（一八五二）、納戸奉行に就任し、安政三年（一八五六）、船奉行兼町奉行となった。安政四年（一八五七）、学校所掛を命じられ、学校の管理運営にあたった。家譜の記録も続け、西之表の名戸長といわれた。県議会でも活躍し、その後三島汽船会社創設、熊毛汽船会社設立などの事業に挑んだが、事故等で倒産した。不幸が重なったが、島づくりへの崇高な壮挙として高く評価される。

平山円まどか（簗月・股蚊またか）（一八七九—一九一九）

小牧生まれ。島の三秀才といわれ、頭脳明晰、特に絵には、天分の才能をもっていた。幼い頃から家学を受け、豊山の種子島学校で学び、漢詩をよくし、またよく英語を勉強した。さらに暇を得て好きな絵に取り組み、初めは美人画ばかり描いていた。後半に至り、風景画に変わった。自由奔放な生活の裏に蔵書売り、屋久島からの返電、焼酎代の工面など、数々の逸話がある。中国風の南画、特に淡々とした山水画が多い。

最上宏（白雷）

（二八八三—

九六一）

小牧の坂之下生

まれ。小学校を卒業し、上京して神

田中学校へ入学し

た。長崎医学専門

学校（今の長崎大

学医学部）へ進学し、二四歳で卒業した。さらに医学を究めよ

うと東京帝国大学医学部専科に籍をおいて研究を続け、同時に

青山で開業。明治四十三年、帰島し、郷里で開業した。大正初

期からは政治家として活動し、北種子村会議員、熊毛郡会議員、

鹿児島県会議員、戦後は西之表町長、西之表市長などを勤めた。

西之表港の重要港湾指定にも尽力した。市役所駐車場に胸像が

建立されている。

牧 龍 太（二八六四—一九五二）

牧 彬（二八八九—一九七四）

小牧生まれ。龍太は鮫島新蔵の次男で、母方牧家の養子とな

る。種子島準中学校漢籍科を優秀な成績で卒業後上京し、司法

省の法律学校へ入学した。学資が不要となり、それを無駄にせ

ず、父を東京見物へ招いた。卒業後、神戸始審裁判所へ奉職し、



最上宏胸像

法曹界で活動することになった。その後、鹿児島・宮崎・大島・長崎・平戸・佐世保などに転勤し、佐世保で退官した。佐世保で三十五年、弁護士を開業し、この間、同市で市議会議員も務めた。

彬は龍太の子で、父の意志を継いで鮫島宗弘成績記を「父祖の思出」と命名し編集製本した。また、八三歳のとき「夢の半世紀まえ」と題し、自分の思い出の記を編集製本した。京都帝国大学電気工業科を卒業し、奈良の大和電気へ就職した。その後、広島県福山市の備後水力電灯会社へ転勤し、更に三菱造船神戸造船所へ転勤した。潜水艦を担当し、工場長となり、一〇年以上国防の第一線で活躍した。

川口雪篷（香雲）（二八一八—一八九〇）

出身は不明で、江戸生まれで先祖は種子島という説や、西之表納曾生まれという説などがある。柳田桃太郎著『種子島の人』によると、温厚で特に書をよくし、好学の念強く、家学で経書を学んだが、これに飽き足らず大志を抱きしばらく鹿児島で修学、さらに上

京し、特に陽

明学の研究に

没頭した。鹿

児島へ帰って

から島津久光



川口雪篷の書

の写字生として起用され、その仕事に心血を注いだ。この間はずからずも同僚の嫉妬をうけ、沖永良部島へ流島となった。この折、牢中で西郷隆盛と出会い、隆盛に書を指導した。鹿児島へ帰ったあと西郷家の家族と同居して終生その子弟の教育にあたり、死後は西郷家の墓地に埋葬された。

上妻謙三宗武（一八三七—一九一四）

納曾生まれ。生まれながらにして肝っ玉が大きく、小事にこだわらず、ずば抜けた根性があった。人物非凡で、激動期に対処できる大器の一面を持ち、花鳥風月に接しては、この島伝統の歌心を持ち、悠々自適のところも見せ、硬軟兼備の好骨漢であった。明治六年、三六歳のとき西之表戸長に任命された。西南の役では、旧島主の守護にあたった。同十年、再び西之表戸長となり、同二十二年、北種子村の初代村長となった。同二十六年、五六歳で退職した後は、彩雲社の中心となり、後継者の育成に尽くした。歌集『熊毛集』の編集にあたった。

中田時懋（一八五三—一九二七）

納曾生まれ。王政復古の折、薩長土肥の四藩から優秀な若者達を選出し、天皇護持の近衛兵を推挙した際、時懋もこれに選ばれ、明治四年、一七歳のとき、初めて上京し、新式教練を受け軍務に服した。任期満了後も陸軍士官学校へ応募し、第一期生として、新式高度の教育を受け、同十年、二四歳のとき、

卒業し、陸軍砲兵少尉となった。この年、西南の役が起こり、これに参戦した。翌年、参謀本部へ出仕した。新政府の富国強兵策に従い、陸軍の中枢にいて、国防の近代化へその敏腕を振るった。同三十七年の日露戦争時には、台湾澎湖島の馬公の要塞司令官として、南方防衛を任された。その後、陸軍中将となり、栄進、予備役に編入された。

河内礼蔵（一八六二—一九二七）

納曾生まれ。公立種子島準中学校の最初の修了生。明治十二年に上京し、同十五年、陸軍士官学校へ入学した。同十八年、第六期生として卒業して陸軍少尉となり、歩兵第十八連隊小隊長となった。同二十六年、同連隊の大隊副官となった。翌二十七年、日清戦争に出征し、明治三十二年、陸軍歩兵少佐となった。同三十七年には日露戦争に出征し、陸軍歩兵中佐に昇進した。同四十年、陸軍歩兵大佐に昇進し、同四十四年、陸軍少将、大正五年には陸軍中将へ累進し、第二師団長となった。

川口盛三（春溪）（一八八七—一九六七）

納曾生まれ。幼い頃から絵を父に学び、早くから春溪と号するほど上達し、一六歳の頃まで日本画に取り組んだ。大阪で洋画を学び、明治末、上京し、白馬会設立の絵画研究所へ入門後、藤島武二を含め一流画伯から直接指導を受けた。時折帰郷し、桜島や種子島の海岸や牛を描き、初めて油絵を郷土に紹介し、



古市静顕彰碑

指導した。毎日のように絵筆を握り、作品として「開聞岳遠望」「慈遠寺の黒松」「洲之崎風景」「桜島の風景」などが知られる。

古市 静（一八四七—

一九三三）

中野生まれ。幼き頃より

向学心が強く、二度までも

上京して勉学、私立の女学

校と夜学校を経営するほ

か、幼稚園を創設、幼児教育の先駆的偉業を果たした功労者である。森有礼に学び、明治十年、三〇歳の時、お茶の水女子師範学校に入学。同十三年、東京にて独力で私立時習女学校を開設、国語・漢文・裁縫を教えた。同十七年、時習女学校を廃し、桜井女学校へ転じた。同十九年、駒込幼稚園創設、沖静幼稚園と改称、大森幼稚園（昭和二十三年、うさぎ幼稚園と改称）と改称、大正五年将来を考え、幼稚園を譲渡した。昭和四十二年、わかさ公園に顕彰碑が建立された。

## 第八節 年中行事

### 一 現在も伝わる行事及び近年まで続いた行事

正月

昭和の中頃まで榕城小学校講堂で年始会が行われていた。

各家々でも昼間から酒を酌み交わすので、「酔っ払い」が多く、子どもたちは追われてキャツキャツと言いながら逃げ回ったという。

大の始

島の平安を祈念して、栖林神社射場で正月十一日に古式ゆたかに執り行われる。

温座祈念

島の平安を祈念して、本源寺において正月十一日から三日三晩経を読み明かす。現在は日典寺と交互に実施されている。

節分

西町東町では、通りを子どもたちが「ぜんぜんまき（まけ）ホーイホイ」と唱和しながら歩くと、声を聞いた家々から小銭が通りにまかれる。それを子どもたちは拾って、帰りに駄菓子屋で好きなお菓子などを買って家に帰る。けっして拾った小銭

は家に持ち帰ってはいけなかった。厄払い、厄落としの意味があった。

### 曾我兄弟の傘焼き（五月）

鹿兒島で行われている曾我どんの傘焼きにならって、西之表港のガンギで傘焼きが昭和初期まで行われていた。小学三、四年生が家々から破れた傘を集める。夕方に西町の会宅に集まる。青年たちによって傘がガンギに運ばれ、積み上げられる。子どもたちは、曾我兄弟の歌を歌って海岸へ向かい、日没になると傘に火がつけられ、炎が高く天に上る。青年たちが別の傘を火の中に投げ入れる。町の人々はそれを海岸から眺めていた。

### 六月 燈

夏になると各神社で六月燈が催された。様々な面白い絵が描かれた四角の灯籠や生け花、屋台が並んだ。

### 祇園祭・太鼓山

八坂神社境内を起点に市内を太鼓山・山車が繰り出した。昭和時代までは七月二十五日に実施されていたが、近年は鉄砲祭として南蛮行列と合わせて八月に実施されている。

### お 盆

麓のある家では昭和初期、神仏混交により、仏教、神道にか

かわらず、八月十四日未明に提灯を掲げ、裸足で墓地へ精霊を出迎えた。墓石の花瓶にはソウハギを加えておく。塩、米、焼酎、線香を上げ、翌十五日夕刻に提灯を掲げ墓地へ送り、帰り道は提灯の明かりを消した。この期間は家庭では仏壇、神棚の前に精進料理のお膳を上げ、祖先を偲び静かに過ごした。

### 正月前の準備清掃

年末は、各家の生垣の手入れが行われた。ある家では山で生垣を修繕するための竹や、正月飾りに使う松、ユズリハ、ウラジロなどを採取し、門松・しめ縄を作っていた。庭を掃き、砂を撒いて清めた。

### 町 祈 禱

正月四日に公民館に集落民が集い、一年の平安を祈願する。

### 潮 祀 り

古城の丘の上には石碑があり、潮の神が祀られており、毎年潮祭りが執り行われていたが、現在は公民館敷地に移設して、町祈禱の後に執り行われている。

## 二 史料に残る年中行事

麓集落における特有の年中行事は、現在は取り立てて述べるようなものはないようである。史料に登場する年中行事をいく

つか紹介し、古い時代の様子をみてみたい。

### 「つのみやじょう」

榕城校区の農村集落では「がんじょうじ（願成就）」や「このみやじょう」などの行事が行われているが、麓集落では行われてはいない。「このみやじょう」という行事は、養蚕にまつわる行事であり、昔は麓集落でも行っていたようである。月窓亭主人羽生六郎左衛門道潔の編さんした『種子島家年中行事』の「第二部種子島御館年中行事 御家年中行事附録卷之二、正月中之事」に、「十四日之事」として「蚕の宮の祭り」が記されている。

『種子島家年中行事』の、「鹿児島御館年中行事一部編」の編さんは文化十五年（一八一八）で、「御家年中行事附録卷之三」を編したのは六九歳の時、天保七年（一八三六）である。「このみやじょう」は、これから四〇年ほど前の一八〇〇年前後頃までは麓集落でも行っていたことが記されている。養蚕に伴う行事で、古い時代には種子島でも養蚕が行われていた名残りであるろうとしている。

### 「おいはひ」

同じく道潔の著した『故実原要抄』の一部が「第三部 附載」として『種子島家年中行事』に紹介されている。その中の一つに「おいはひ」という行事が記されている。道潔が編さんした

の頃には、すでに廃れていたものようである。

正月十四日に行われ、タブの枝を八・九寸に切って枝を剥ぎ、松の脂でいぶして煙で模様を描いたものを「おいはひ」と言い、門口に差し掛けたり、仏壇に供えたりするのだが、これとは別に三尺ほどのものを作り、若者が持つて二〇歳前後の女性のいる近所の家に押し入って、女性を追いかけまわすという一見恐ろしい気な行事があったという。

若い女性の肩を「そと打ちて」とあるから、一種の戯れのことである。いくら「男女七歳にして席を同じゅうせず」という時代であっても、隣近所あるいは同じ集落のことであるから、お互いある程度見知った仲であろうし、ましてや毎年のことであるから、女性側も恐怖心でもって逃げまわるわけではないだろう。道潔の祖母が言うように、子どもが授かるようにという祝いの意味があるようだ。

### 明月鑑賞の宴会

江戸時代は、儒教道徳による封建社会であり、男女は全く席を同じくしていなかったかというところでもないようである。『種子島家譜』の文政九年（一八二六）八月の条に次のようなことが記してある（『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ八』以下同じ）。

古来八月十五日夜少年輩称賞明月男女席會宴、以近年每郷定長教誨少年輩、雖其風寢止、然猶禁令小兒輩定宅日夜宴

會、事開于左、

「古来」とあるので、昔から「お月見」として毎年の行事として行われていたのだろう。

『種子島家譜』に、元禄十二年（一六九九）一八代久時の出した三三一条からなる達示があり、これによってお月見の宴会等は禁止されたはずなのだが、実は連綿として続いていたのだろう。さらに少年、小児が男女入り交じって日夜宴会をするというのである。宴会というからには、当然酒も入っているだろうから、現在でいう「小児」ではなく、それなりの年齢の若者のことだろう。焼酎を飲み、語るだけでは「日夜」は保たないだろうから、歌ったり踊ったりもあつたのだろう。なかなか盛んな男女の交流会のようである。

## 第九節 伝 説

『種子島研究』（二二・二三号）や『ふるさと歴史散歩』を参考に、榕城校区に残る伝説をまとめた。

### 鳩 磯

旧慈遠寺（現八坂神社）の後ろの丘を春日山という。律宗のとき、奈良の春日山を勧請したものである。その春日山に「鳩磯」と刻まれた石碑がある。「懷中島記」によると、享禄・天文の頃（一五三〇年前後）、唐船一六艘が赤尾木の沖（西之表旧港）に襲来し、石火矢を放つて来て、赤尾木中大騒ぎになった。このとき、日輪寺の僧日源が理由を問おうと、僧俗二人の付き添いのもと唐船に乗り込んだ。すると急に船が出火して南風にあおられて風下の船にも燃え移り、一六艘全てが沈んでしまった。また、次のようにも伝わっている。

慈遠寺の僧日尊が社殿にこもり、一心に唐船の退船を祈願した。すると、春日山から二羽の山鳩が飛んできて社殿に入ると、香炉の線香をくわえて飛び去り、敵船の帆柱にとまった。そこで船火事が起こり、ことごとく敵船は焼失した。そのとき、鳩が休んだ大石を「鳩が瀬」と呼ぶようになった。

### 札 の 辻

現在の西之表幼稚園のあたりが藩政時代の糾明所（色々な事

柄を調べる所)の跡地である。

官布告や高札を立て、人々に告知を行い、この地を起点に島内各村までの距離や社寺の方角などの表示を行ったという。

その跡地に明治十年(一八七七)、真宗本願寺派西本願寺系の説教所が設立されていたが、その跡地に同三十五年に西岸寺が建立された。

## 木の下

昔、町のあちこちにアコウの木が茂っていた。岩坪鮮魚店の裏にあった木が一番大木で、夏にはその木陰は人々が涼を楽しむ場となり「木の下」と呼ばれるようになった。

また、天文十二年(一五四三)の鉄砲伝来の折、修理のため陸へ引きあげた南蛮船をつないだというアコウの大木もあったという。

しかし、大正十四年(一九二五)の大火事や昭和二十年(一九四五)の空襲で焼けてしまった。

## 番屋の小路

藩政時代、番屋(番人の詰め所)が旧港の所の有馬石油店のあたりに置かれていたので、その通りを「番屋の小路」と呼んだ。

## 勘当坂

九州電力発電所前の、本城へ上がる坂を「勘当坂」という。この左の山の上に渡辺勘当という人が住んでいたことからこのように呼ばれるようになったという。

## 古城

種子島の歴史がまとめられている『懐中島記』によると、「信基より六代時充までは本城。一二代忠時は池田の黒山尻。一三代恵時は屋久田、一四代時堯は本源寺の地、のち内城。一六代久時は野久尾、のちに石峯と号す。慶長十四年、内城に移る。一七代忠時寛永元年、内城上の屋地に家し、今に至る。」とある。ここから種子島家歴代の居城の変遷がわかる。

一六代島主久時のいた野久尾は、現在の野首の先の種子島測候所跡から南東一帯の、古城こじょうが原はらや古城ふいじょうという地域である可能性が指摘されている。また、内城とは旧榕城中学校の場所である。

久時は賢母古田御前に育てられた。文禄・慶長の役で島津義弘に従い、種子島鉄砲隊を率いて計四回も従軍し朝鮮に渡った。その活躍ぶりは目覚ましかったという。こうして島津氏との主従関係は密になり、久時は島津藩の家老職を務めるまでになったのである。

犬の馬場いんばば

榕城（赤尾木城）の前の約一〇〇トメの広い道のことである。当時の武芸の鍛錬として騎射三物がなされていた。それがこの場所である。騎射三物とは流鏑馬・笠懸・犬追物で、ここで犬追物が行われていたことに由来すると考えられる。

犬追物というのは、馬場に犬を放し、馬上から墓目の矢（射るものを傷つけないように矢尻がついていない）で、追いかけるながら射るといふ中世武士の間で盛んに行われていた騎射の練習である。

新城しんじょう

新城とは小字名で、豊山の南隣に位置する。現在のひばり園のあたりは新城の「谷」といわれ、中に入ると小さな道が曲くねって続いており、そのうえ深い谷が道に沿ってあった。

文禄四年（一五九五）豊臣秀吉の命で三州豪族の領地替えがあった際、一六代島主久時は薩摩の知覧の領主になり、島津以久が種子島の領主になった。そのとき、以久公の居城があったところといわれている。三年後には島に帰り、治めるようになった（現在の新城の笹川氏宅付近だろうといわれる）。上の山には土塁の遺構が残っている。

平 田

平田の字は、野開・平田・平田原などである。平田字の所に

早魃でも枯れない泉がある。この泉の上にガランという場所がある。ガランには行くなど親が教えた。

平田の真上の「火たき松」には昔から田の神様を祀っており、「タネカミ祭」といって、収穫前後に二回祀った。この松を切つて売ったところ、売った人もひかせた牛も死んだという。

石 堂

石堂は古くから石堂といった。石の堂があったからだという。この集落は、明治十六年から三年続けて襲ってきた台風のために、大変な被害を受けた甌島の人々が移り住んできた移住集落である。最初は数戸の入植で、その当時は竹山や木山だった。ここは、西之表の土族の土地が多かった。土族の人も馬をひいて農業をしていたが、子弟を上为学校に出すために、次々に土地を手放した。入植した人々は、その土地を入手し、土地を開いて家造った。集落中心付近も山だった。その上に少しの畑があり、土族たちが砂糖を作っていた。

## 第一〇節 史跡、神社仏閣

種子島の神社の様子は、鹿児島県内でも少し様相を異にするように思われる。例えば旧藩領内では諏訪神社（及び南方神社）が極めて多く存在している。これは島津氏が諏訪神社を守り神として崇敬していたことによるものである。

これに対して種子島では、神社庁の所管していない神社も含めると、牧の神やエビス神社を除いても一〇〇社ほどあるが、諏訪神社は一社のみである。この諏訪神社は、一〇代種子島幡時が勧請したとされるもので、種子島氏が島津氏に臣従するはるか以前のことである。このことから種子島に対する島津氏の直接的影響が薄いことがわかる。ほかに、種子島の神社については、県本土の神社に比べて、いくつかの特徴が見られる。田の神については、自然石や板碑を祀った田の神信仰も多く確認されているが、県本土のような石像は確認されていない。馬頭観音あるいは馬頭神など牧の神としての農耕神への信仰も見られるが、これまた県本土のような石像は確認されていない。森田清美氏は、「馬頭観音について」（『鹿児島民具第二号』）において、「馬頭観音像は、鹿児島において十八世紀以降、いわゆる石像物製作ブームに乗って作られたものが多い。」と記している。種子島にはこの石像物製作ブームは及ばなかったのだろうか。

一方で次項に記すように、神社入口等に設けられた石柱など、

石に対する信仰、巨石信仰らしきものが見られる。これらの石柱は、明治時代以前に寺であった神社にも見られる。このことは神社のみならず、寺も含めた種子島の古い信仰を示すものではないだろうか。

多くの神社において、参道の入口あたりの左右に丸みを帯びた石柱が立ててある。これはほとんどが自然石であるが、四角柱に加工されたものもある。この石柱は多くの神社に見られるが、榕城校区においては、弓矢八幡神社や宮原神社に見られる。弓矢八幡神社は加工した角柱で、宮原神社では自然石である。

次に、神社の建物の配置についてである。県本土の神社では、拝殿と本殿が別棟であり渡り廊下でつながっているものと、一棟の建物の中に拝殿部分と本殿（神殿）部分とが設けられているケースと大きく二種類が見られる。いずれのケースであっても、拝殿部分という俗の区域と、本殿という聖域とは区分され、聖域は禁足地として神職と氏子総代のみしか足を踏み入れることのできないものであるが、両区域が物理的につながっていることは共通である。

種子島の神社の社殿配置については、拝殿と本殿が明瞭に区分されているものが多い。また、拝殿が山腹に極めて近接して建てられ、山腹には急峻な階段が築かれ、その奥に石祠（神祠）が設けられているもの、拝殿の背後に基壇が設けられ、そこに祠が設けてあるものなども多く見られる。

これらに共通することは、氏子が神を拝する拝殿部分と、神

の在します神祠部分とが物理的に明瞭に分離されていることである。

田の神や山の神などについては、社殿を建てず、自然石を祀っているものが多い。これは、古くからの種子島の信仰の形を残すもので、ガロー山との関係で考えられるものであり、また琉球の御嶽と共通するものがあるのではないだろうか。

神社境内にソテツが植えてあることも多い。南の島であるから、ソテツがあるのは当然であるし、県本土の神社においても境内にソテツを植えている事例は普通であり、珍しくはない。庭木として姿形も美しく、境内の景観のためとも考えられるが、ほとんどの神社に植えてあること、鳥居の下や拝殿の左右に植えてあることも多いことなどから、それ以外の何らかの意識が感じられる。

神木としてはつきりとしているのは、中目神社のシイの巨木などであるが、牧の神などにおいては、松の木やソテツが神木とされているようである。石像など造られない中で、何かしらの依り代としてソテツが崇められたということは考えられることである。ソテツは種子からも育ち、また幹から芽を出すなど、成長は遅いが旺盛な繁殖力があるとして子孫繁栄などの意味を持った特別な樹木として認識されていたのかもしれない。

また、南種子町西之では、昭和三十年代のことであるが、盆に「シヨリリヨ（精霊）棚」というものを作っていた。三〇センチほどの竹で四角い枠を作り、芭蕉の葉を敷いて棚として、

さらに三方をソテツの葉で囲んだものを玄関たる縁側の隅に置き、それに精霊への食べ物を供える。ソテツの葉で囲うということには、聖なる食べ物を守り、魔を避ける意味合いが感じられる。

#### 宮原神社（中西）

社名は宮原という地名をとったものであると思われるが、その「宮」とはおそらくは伊勢神社のことではないかと思われる。社殿には「立正安国」と記した額が掛けてある。法華宗と深くつながったものようである。

#### 八幡神社（西町）

鹿兒島県神社庁熊毛支部編の『神社調書』には、次のように記されている。

祭神は応神天皇。田

上の宗家義親貞治五年

甲州田上郷より来島し

始めて清運公に謁し、

遂に臣属す。八幡宮は

義親の祖神なるを持つ

て祠を石躰原山に立て

神位を奉安せしむ。後

に公の命を奉じ遷して



宮原神社

慈遠寺番神堂に合祀す。実に延徳二年八月十五日なり。今に至りて祭祀懈らず、水旱病疫瘡つて応ぜざるなしと。その靈験の最大なるもの即ち鳩の世の伝説あり。明治元年十二月十五日春日山に社殿を建立し奉安す。今の八幡神社是なり。

### 八坂神社（西町）

鹿兒島県神社庁熊毛支部編の『神社調査』には、次のように記されている。

祭神は建速素戔嗚命。明治五年西町の父老相議りて八坂の神を奉斎せんと議決し、鹿兒島市の神官瀬川礫に願ひ、鹿兒島市八坂神社より分霊、明治五年旧七月十日榎本新吉の所有船唱徳丸を儀し氏子総代榎本新吉外三名鹿兒島に遣はし御神霊を迎え社殿を造り安置す。明治二十年慈遠寺の故趾に社殿を遷し現在に至る。

### 西岸寺（西町）

『西之表市百年史』には、次のように記されている。

鹿兒島県が一向宗布教の禁を解いたのは明治九年九月であった。ところがその翌年にはさつそく種子島布教もまず西之表で開始された。浜田金次郎、福島善四郎など信徒の尽力によって西町の旧藩時代の糺明所跡に説教所を設立し、明治十年、越中真教寺の住職野崎竜天師を招いて開教した

のが、明治十年であった。竜天師は当時、西南の役私学校党より官の間諜であると怪しまれ、たびたび迫害をうけた。その後、数名の布教師が更迭された。明治三十五年、村岡映智師が甌島から来島し、寺号をはじめて西岸寺と公称してその住職となり、本堂ならびに庫裡を建設した。その後明治末年に滋賀県彦根市から来島した村岡氏の女婿野田竜華師が住職となり、国上や野間にも説教所を設け、本派本願寺（西本願寺系）の布教に努めた。

### 種子島家御坊墓地（野首）

種子島家の墓地であり、初代信基からの墓石がある。しかし、種子島氏が種子島に入部したのは六代時充からである。墓石の文字も摩滅していたが、幕末に松寿院が整備した。

### 二十人家墓地

二十人家とは、種子島氏の種子島入部からの譜代の家臣とされ、船手方として種子島氏の対外交渉を担った。はじめ五家であったが、次第に庶流も含めて二十家となったものである。右の御坊墓地のすぐ傍らに主人家を守るように墓石が配置されている。

### 石清水八幡神社（野首）

『古城原創建八幡祠記』には次のように記されており、明治十年（一八七七）に創建されていることがわかる。

古城原在野首西北之隅。郷人某々謀創建八幡祠（八幡祠 祭応神天皇者）奉祀焉。實明治十年丁丑十二月八日也。

### 栖林神社（中目）

鹿児島県神社庁熊毛支部編の『神社調査』には、次のように記されている。

祭神種子島久基公の仁政水産業文教すべて人民愛撫に非ざるは無く、其の功德偉大にして島民の敬慕念厚きに依り二十三代島主種子島久道の室松壽院夫人島民と謀り、文久三年三月十八日祀堂を創建し栖林大権現と称えて祭祀、毎歳米三石を祭祀料として供す。

明治二年十二月二十一日赤尾木神社と改号し明治十三年四月栖林神社と改号す。

大正十四年一月五日早曉西之表市街地の大火に社殿類焼し、昭和四年五月十七日、西之表中目七五九七番地の現在地に移転改築せり。

### 吉祥山本源寺（中目）

『西之表市百年史』には、次のように記されている。

慈遠寺、大会寺とこの本源寺を「赤尾木三ヶ寺」といい、いずれも京都本能寺、尼崎本興寺の末寺である。右二寺は律宗以来の古刹であったが本源寺は文明元年、島主時氏公の命により、浄光院日良法印が開山した。永禄六年、十四

代時堯公の時、その子時次が七才にて死去し、その菩提を弔うため、坂下（現在の市役所附近）にあったのを坂上の現在地に移し再建した。

元禄二年時の寺領は百石だが、社領三十石、位牌所二十石で計百五十石。山門は現在の警察署（註、現在は移転）附近にあり、裏門は市役所南側にあつたらしく、この附近を今も門前と呼んでいる。

廃仏後、明治十一年から元鹿児島正建寺住職柳田日皓の努力で翌十二年尼崎本興寺日経上人の来援を得て、西之表の春田日皎宅に仮説教所を設け、島内を巡回し布教した。復興に尽力した日経、日皓、日誘の各上人墓は境内にあつて、復興初祖、二祖、三祖としている。

明治十七年九月に表門を新築するも、翌十八年八月、火災により全焼している。同年十二月に庫裡を再建、種子島家の住宅が寄付され、同三十八年、本堂が再建された。廃仏の打撃を受けたが、島主家菩提寺としての面目は残っている。本源寺下の島主家墓地御拝塔は維新前の姿のまま保存されている。



吉祥山本源寺

## 赤尾木城跡（中目）

赤尾木城は、現在の榕城小学校の場所にあり、種子島氏の居館であった。居館は、時充の代から、本城・池田黒山尻・屋久田・内城（旧榕城中学校）・野久尾と移り、その後元和九年（一六二三）十二月、上之城（現榕城小学校）に移った。

寛永二十年一七代忠時は藩主光久の命により鹿兒島に居を移し、その後種子島家当主は鹿兒島常住となった。

## 御拝塔墓地（中目）

種子島家の歴代当主の墓地であるが、当主鹿兒島常住の後は、拌み墓が置かれている。松寿院やカタリナ永俊尼の墓石もある。

松寿院は、九代藩主島津斉宣の娘で、二三代久道の室である。久道が若くして亡くなった後、当主名代として政務を執った。また、養嗣子として迎えた二四代久珍も若くして亡くなったため、その幼い嫡子を後見しながら女殿様として島に尽くした。

カタリナ永俊尼は、初代藩主島津家久（忠恒）の室の母であったが、キリシタンであったため、寛永十一年（一六三四）に種子島に配流された。大長野に暮らした後、種子島氏居館近くの井之上に移住した。墓石に「是人於仏道決定無有疑」と刻んであり、転宗せずキリシタンとして亡くなっていったことが理解される。

その近くには一四代時堯の側室で一六代久時の母である古田御前の墓石もある。これにも右と同じ語句が刻んであり、古田

御前は異教徒であったことがわかる。

## 月窓亭（中目）

江戸末期、家老として、また、当主の命により『御家年中行事』を著すなど知識人として活躍した羽生六郎左衛門道潔の屋敷である。道潔隠居後、嫡男である直一郎は御家の財政改革を担う若手リーダー六人の一人として抜擢されたが、突如この六人は七島へ島流しとなった。道潔はその後も『御家年中行事属類雑記』を著すなど御家のために尽くしていたが、嫡男が島流しとなった一五年後、孫に看取られて亡くなった。嫡男が許しを得て帰島したのはその四年後であった。

道潔は種子島において華道の創始者ともされているが、道潔翁を看取った孫、羽生道則もその影響を強く受け、京都の池之坊家元に学び、明治十五年には大日本総会頭職となった。この道則が羽生慎翁道則である。

## 吉留伝平碑（中目）

孝行者として島主及び藩主から表彰されたことを顕彰する碑が市役所敷地に建立されている。

『神社佛閣其外旧跡等礼帳』には次のように記されている。

赤尾木町人吉留伝丙孝行に付天保二年御褒美被仰付 其後安政二年又々青銅頂戴被仰付候 安政四年丁巳九月廿九日七拾四歳にて相果麓内雲之城と申所に墓所御座候 御證

文左之通

右多年老母へ深切に致孝養有所中之為自分物入を以同所  
甲女川へ新規に橋掛調候段相聞得奇特成心入にて候(略)

伝平は親孝行だけでなく、天明二年(一七八二)には甲女川  
に自費で橋を架けるなど社会貢献も行った。このことも含めた  
褒美であった。

玉川招魂碑(東町)

明治十年西郷隆盛が私学校党を率いて新政府と戦った西南の  
役に種子島からも五百数十人の人々が参軍した。そして激しい  
戦いの中で西郷軍は敗れ、種子島私学校生も多数が戦死した。  
戦後、明治十三年二月、生存者により戦死者一〇八人の霊を祀  
るための招魂碑が東町玉川の地に建てられた。

明治二十九年九月には西村天囚による碑文の「紀恩招魂碑」  
が建てられている。西郷隆盛は、賊軍の将として官位を剥奪さ  
れたが、同二十二年、大日本帝国憲法が發布された際、大赦に  
より赦され正三位を追贈され、名誉回復がなされた。この「紀  
恩招魂碑」はこれを受けて、参軍した人々の名誉を回復し、戦  
死者の御霊を慰霊するものであった。

菅原神社(天神町)

鹿児島県神社庁熊毛支部編の『神社調査』には、次のように  
記されている。

万延元年大宰府神社よ

り御神霊を分祀し今年社  
殿を建立す。当時、御建  
立主取として徳永小弥太、  
川口六郎、牧瀬伝之丞、  
平瀬友助等これに当たる。  
各自家業を勉励し、即ち  
菅公の御遺誠を奉じ、神  
徳に報い奉らんとす。

大会寺跡(天神町)

『西之表市百年史』には、  
次のように記されている。

本源寺、慈遠寺と並ぶ赤尾木三ヶ寺の一つである。創建  
は不詳であるが、七代頼時(貞治五年、肥後州日之岡に戦死)  
の菩提を弔うために建立されたと伝えられ、これからする  
と応安年中の創建とも考えられる。初め甲女川周辺の屋久  
田にあったが田屋敷に移り、田屋敷一帯が寺地であった。

若狭墓所(田屋敷)

天文十二年(一五四三)のポルトガル人による鉄砲伝来時の  
主人公の一人である若狭の墓所である。雲之城墓地にあり、父  
八板金兵衛の墓所の背後の丘にある。



菅原神社

## 山田歌子墓所（田屋敷）

若狭、八板金兵衛の墓所と同じく雲之城墓地にある。江戸末期、一〇代薩摩藩主斉興の後継者をめぐる御家騒動（お由羅騒動）で肅清された斉彬派の重鎮であった山田市郎左衛門清安などが切腹を命じられた。その妻歌子は嘉永三年（一八五〇）に種子島に配流された。種子島においては、歌人として待遇され、島の文学の興隆に寄与した。

## 弓矢八幡神社（城）

創建年次は不明。境内に西南戦争での戦死者二人の招魂碑がある。

## 高野神社（城）

創建年次は不明。種子島氏が南島一二島を与えられた頃、島を支配していたとされる三入道の一人高野入道を祀る。祠の後ろに石塔がある。

## 比良野神社（城）

創建年次は不明。入口の石碑に「比良野神社落成記念 昭和六十三年十一月十三日」とある。

## 小牧野神社（小牧野）

『種子島の社寺・民間信仰神』には、次のように記されている。

創建年次は不明。

『社寺』より。神社の世話役は部落の人たちが交替で行い、例祭は春八十八夜種子播き時期と、秋は十一月十一日実の収穫期の二回。部落民一同神社に集まり、南無妙法蓮華經の題目を唱えて、祭を行っている。



小牧野神社

## 鮫島神社（小牧野）

創建年次不明。小牧野を拓いた鮫島氏の氏神を祀るといふ。

## 桃園神社（桃園）

『種子島の社寺・民間信仰神』には、次のように記されている。大正三年の桜島大爆発により罹災者となった人達が、種子島に多く移住した。その内桃園には三十世帯、二〇七名が入植、もともとから住んでいる人たちと協力して、新しく桃園部落が出来たのである。その当時、故郷桜島の御岳神社の御分霊を勧請し、広く村民安泰、五穀豊穡を祈願して、御岳神社として奉祀していたが、噴火による被害が漸次復



桃岡神社



横野神社

旧してくると、再び桜島に帰る人が多くなった。それにつれ神社もさびれてきたため、後に残っている人々で相談して、改めて伊勢神社の御分霊を勧請し、御岳神社の御神霊を合祀、社名も桃園神社として現在地に遷座したものである。

#### 横野神社（本立）

『種子島の社寺・民間信仰神』には、次のように記されている。創建年次不明。本立集落の山中にあり、大山祇神を祀る。横山神社から分霊し勧請。

急坂を登ると、丁寧に造られた二段の境内があり、社殿は無いが、本立という古い歴史の感じられる地区の趣きを感じさせる神社である。

#### 石峰山萬徳寺（上之原町）

『西之表市百年史』には、次のように記されている。

明治十九年旧四月および翌年四月に甕島から移住した三百戸の内、大谷派に属する者が百五十戸、そのうち西之表市（旧北種子村）に在る者が九十戸であった。移住後数名の代表により鹿児島別院に布教師の派遣を再三陳情歎願し、明治二十二年にいたり、別院より竹中徳永、寺田浩然師等が慰問使として臨時出張し、移住部落を次々と慰問し布教した。一巡し終わるのに三カ月を費した。その仲継地は岳之田の久岡焼酎醸造所の前身大竹山氏宅であった。その後、信徒の中より臨時出張のみでは心細いので、常住の在勤者派遣歎願の結果、明治三十年大分県出身者戸辰雄師（後枕崎称讚寺開基）が初代在勤として赴任以来、活発な布教活動をつづけ、明治三十二年に現在の西之表石之峰に五百四十坪の土地を入手し、三十三年春には約二十坪の古家を購入移転し、その年の秋には西之表説教場としての認可があり、三十四年四月五日の開場式によって正式な布教活動ができるようになった。（略）

大正十四年十二月十八日付けをもって本山より、翌十五年一月七日付けをもって県知事より万徳寺として寺号公称の認可がおりた。この年起工し、翌昭和二年三月、紫<sub>(ミ)</sub>震殿造り五十六坪の本堂と、三十二坪の庫裡の完成をみた。現在は上之原町に移転している。

第二節 郷土芸能

『種子島民俗芸能集』（下野 二〇一〇）によると、かつて「大踊」が城・小牧野にあったようだが、昭和三十八年（一九六三）当時、すでに踊られていない。中西には上西の花里崎から伝わった「強張踊」があり、下野氏の調査時点では伝承者もいたようだが、現在踊られていない。また、中目や納曾には「土踊」があったが、これも絶えている。

洲之崎の「どすこい」のみが現在も踊り続けられている。

どすこい

女性が円を描いて踊る「どすこい」がある。エビス神社の前で奉納される。しばらく途絶えていたが、近年復活した。

『ふるさと歴史散歩』によると、江戸時代末期、三重県から洲之崎を訪れた人によって伝えられ、当時の二五代島主久尚の御前でも披露された。

また、大正元年（一九一二）に集団赤痢が発生した際には、病魔退散のお払いとして八坂神社境内で奉納された。

「どすこい」は、角力とり節とも呼ばれ、全島数カ所に分布伝承されている。洲之崎のものは、他地区のものとは比べると歌詞が違い、踊り、歌ともにしっかりしていると評されている。それは、島主に見せるために踊ったからだといわれる。

第二節 年表

和暦(西暦)	明 治	榕城校区のできごと
5年(一八七二)		西之表中目に変則小学校を置く 各郷中、共立学舎となる
6年(一八七三)		学校を県に統轄。西之表にあるものを本島の母校として第七三郷校、野間、茎永に分校を置く
9年(一八七六)		一月、女学校を本源寺跡に開く。教師は田上青山、羽生助吉 九月、第七三郷校内に正則小学校を置く(学級教授学校の始まり)
10年(一八七七)		二月、西岸寺創建される(本派本願寺派)
11年(一八七八)		五月、郷校の正則科を分離して榕城小学校と称する
12年(一八七九)		五月、女学校を西之表榕城小学校に合併
13年(一八八〇)		九月、洲之崎に塩田(一町歩)開設される。資金七〇〇〇円。塩一升価八厘
17年(一八八四)		二月十七日、玉川に西南の役従軍戦死者の招魂碑建立。土地一八三坪
18年(一八八五)		八月、西之表市納曾の河内寛右衛門翁の勧めにしたがって指宿郡山川町から移住
20年(一八八七)		八月十五日、本源寺全焼する 十二月、本源寺庫裡(本堂兼用)再建する 十二月、八坂神社を春日山麓に移転改築する 十二月、榕城小学校を西之表高等尋常小学校と改称

和暦(西暦)	榕城校区のできごと
22年(一八八九)	一月十一日、大的始式を復活する。廃藩以来廃止されていたが、春日山八幡社社頭にて行う
23年(一八九〇)	四月、公立種子島学校在私立となり、尋常中学校三年までの授業を行う
25年(一八九二)	一月、簡易科小学校は尋常小学校となり、修業年限を三カ年とする
29年(一八九六)	十月、収税署が西之表に設置される
31年(一八九八)	十一月二日、収税署が廃止され、種子島税務署となる 城ノ浜、綿打川の北に避病舎建設、のち大野崎、鉄砲場に移転する
32年(一八九九)	三ヶ浦(池田・洲之崎・遼泊)漁民に、馬毛島漁業根拠地の縁故払い下げ
33年(一九〇〇)	一月、大谷派万徳寺が創建される。中田市蔵の軒旋により、川辺郡枕崎称賛寺の戸田辰雄により布教が始まる
34年(一九〇一)	十月、榕城校から女子を分離して、女子榕城尋常高等小学校を置く
35年(一九〇二)	一月八日、北種子村立女子実業補習学校を創設。女子榕城校に附設
37年(一九〇四)	三月三十一日、私立種子島学校の組織を変更して郡立とし、種子島農林学校とする。修業年限三年、農業科乙種
38年(一九〇五)	四月一日、女子榕城小学校高等科、就業年限を四年とする 四月一日、女子榕城小学校を本源寺東に分離する 四月一日、北種子村立女子実業補習学校を北種子村立女子職業学校と改称

和暦(西暦)	榕城校区のできごと
38年(一九〇五)	九月七日、種子島農林学校校舎を摺木田に新築する
39年(一九〇六)	八月二十三日、大暴風雨。甲女川の河口が決壊する
41年(一九〇八)	一月、消防組が組織され、金屋小路の番所を置く 四月一日、榕城小学校が六カ年となり、高等科二年を置く 十二月二十七日、夜西町火災により、六戸八棟が焼失
大正	
2年(一九一三)	九月二日、前田豊山没(天保二年三月十五日生)
3年(一九一四)	三月十三日、桜島移住民戸口調 西之表桃園戸数三〇戸、人口二〇七人、住家改築数三〇戸 三月十三日、桜島移住民戸口調 西之表竹鶴戸数一三戸、人口六八人、住家改築数一一戸 四月一日、女子榕城尋常高等小学校、上西尋常小学校、下西尋常小学校を廃止し、榕城尋常高等小学校に合併する。上西・下西は分教場とし、尋常科三年以下の児童を収容する 四月、榕城尋常高等小学校、高等科三年を廃し補習科を設ける 十一月、村宮屠畜場創設、工費六〇〇円 七月、鹿兒島銀行種子島支店営業を開始。初代支店長、藤田正秋
6年(一九一七)	
7年(一九一八)	四月一日、北種子村立実業補習学校を榕城校に併設 七月二十六日、西之表港修築起工式
9年(一九二〇)	五月、西之表港、県費による改修工事が始まる
11年(一九二二)	三月、榕城校講堂落成(一六四坪)

和暦(西暦)	榕城校区のできごと
12年(一九三三)	四月一日、郡立種子島農林学校、北種子村に移管、北種子村立種子島農林学校と改称 十一月十二日、村営火葬場(西之表古園六三八六番地)落成
13年(一九三四)	三月、西之表港第一期修築工事終了 九月一日、西之表幼稚園(西岸寺経営)設立(七月十六日認可)
14年(一九三五)	一月五日、早暁、西町有川宅から出火、折からの西風に煽られて延焼し、午後四時頃、ようやく鎮火。罹災戸数一二二戸、罹災民五七三人、損害見積額八〇万八六〇〇円
15年(一九三六)	三月十一日、鹿児島県立第一鹿児島中学校分校、西之表に設立される。校舎は榕城小学校講堂を使用 三月十八日、種子島警察署(十四年の大火にて類焼)新築起工。柳田休八の屋敷、移転料とも一二〇〇円にて購入、県に寄贈した土地を使用 七月一日、熊毛支庁設置される 十月二十二日、種子島警察署竣工
昭和	
3年(一九二八)	養蚕組合、乾蘭場新築。西之表町補助七〇〇〇円。県費補助七〇〇〇円 西之表港、第二期改修工事始まる。総工費一六万円。うち地方負担五万三〇〇〇円。工事は南側防波堤の接続、西に新防波堤建設、海岸通りに荷捌場構築
4年(一九二九)	西町、川端川南方に田上七之助埋立工事、約一町歩竣工 四月、乾蘭場、西之表町営場に移る

和暦(西暦)	榕城校区のできごと
4年(一九二九)	八月、田上七之助の埋立地から玉川尻までの埋立工事始まる。出資は鹿児島市の山下格太郎、福岡県人藤瀬、基多村の三人、事業主は徳永祐資。面積三〇〇〇坪
5年(一九三〇)	五月三十一日、西之表青年訓練所を西之表公民学校と改称、種子島農林学校に併設 十月二十八日、西之表町立種子島農林学校学則を改め、鹿児島県種子島農林学校と改称
6年(一九三一)	六月五日、県立種子島中学校、第一回卒業式 十月、鹿児島農事試験場熊毛分場、業務開始
8年(一九三三)	三月三十一日、町内の公民学校を統一して西之表町立公民学校と改称し、種子島農林学校に併置 七月二十一日、西之表町役場竣工
9年(一九三四)	八月二十五日、種子島・屋久島、甚大な旱害。この日から一週間、西之表在郷軍人会員は城の高野入道にて、空砲数百発を撃って雨乞を行う 十一月、三ヶ浦漁業協同組合が発足
12年(一九三七)	四月五日、種子島農林学校を城から上之原に移転する。西之表町立青年学校を同校に併設新築する
15年(一九四〇)	四月一日、種子島農林学校甲種に昇格。高等科二年卒業生を収容、修業年限は三カ年 七月、西之表小牧野地区に、種子島においては初となる黒斑病が発見される
17年(一九四二)	十一月一日、北種子郵便局、種子島郵便局と改称 七月十七日、西之表高等女学校を鹿児島県種子島高等女学校と改称
18年(一九四三)	四月、種子島高等女学校、県立に移管される

和暦 (西暦)	榕城校区のきやう
19年(一九四四)	一月十三日、県は中学校の学区制を実施。種子島中学校は第一学区となり熊毛郡全域の学区となる。種子島高等女学校も同様
20年(一九四五)	四月一日、種子島農林学校、三カ年六学級(定員三〇〇名)となる 四月一日、西之表町立青年学校が独立。西之表新城のもと、大本教教会の建物を校舎として移転 四月十五日、県立種子島中学校校舎を種子島駐屯部隊兵舎として使用 四月十九日、B24戦闘機二機、北方より市街地に來襲。焼夷弾を多数投下し、さらに銃撃を加えて南方に去る。この空襲により、種子島中学校全焼し、軍人に負傷四人、死者二人を出す。疎開のため船待ち滞在中の野間小学校児童のうち三人負傷 四月二十日、種子島中学校は、野首・小牧・納曾・東町の各部落会宅を使って分散授業を行う 七月一日、農林学校を西之表町より県に移管、鹿児島県立種子島農林学校と改称 十月八日、種子島中学校復興校舎、起工式 五月二日、榕城中学校開校
22年(一九四七)	二月二日、種子島測候所西之表分室の建設決定
23年(一九四八)	五月、種子島測候所西之表分室竣工観測を開始 七月、西之表町立種子島図書館設置
24年(一九四九)	十二月、榕城小学校、給食を開始 三月、種子島測候所、業務改革により中種子町野間本所が廃止され、西之表分室が本所となる

和暦 (西暦)	榕城校区のきやう
24年(一九四九)	六月一日、鹿児島司法事務局西之表出張所を、鹿児島地方事務局西之表出張所と改称。熊毛支庁の建て替え工事期間中の仮事務所となる 九月一日、種子島高等学校(男子部)に女子部普通科を収容、種子島高等学校は男女併学となる 十月十三日、種子島高等学校北校舎竣工。男女共学となる 十月十九日、西之表保健所新庁舎竣工(一三三・五坪) 十二月、榕城中学校、県より譲渡された旧三部落校舎に移転
25年(一九五〇)	五月二十一日、種子島高等学校特別教室竣工。男女共学となる
26年(一九五一)	四月一日、種子島農業高等学校全日課程に、女子農業科を新設。定時制及び水産科を二カ年とする
27年(一九五二)	三月二十七日、西之表西浜伏(鴨女町南端)に町営伝染病隔離病舎を竣工(広さ六〇坪)
28年(一九五三)	十月十四日、町の失業対策事業、城ノ浜整地事業起工 十一月七日、榕城中学校全校舎竣工。建坪六二五坪。総経費一〇〇三七五〇〇円
29年(一九五四)	三月三十一日、種子島農業高等学校、定時制別科水産科廃止される 五月、熊毛教育事務所新庁舎(二〇坪、ブロック建て)竣工
30年(一九五五)	三月、西之表町役場庁舎竣工。鉄筋コンクリート一部三階建て、延坪三三〇坪 四月十六日、鹿児島労働基準監督署熊毛分室設置される。西之表西町(慈遠寺跡)に庁舎竣工

和暦(西暦)	榕城校区のできごと
31年(一九五六)	三月二十一日、種子島電報電話局、新局舎竣工 三月三十日、洲之崎地区市街地造成。四三七三坪、完工
32年(一九五七)	四月一日、鹿児島県種子島高等学校を鹿児島県立種子島高等学校と改称 九月、天神橋竣工 十一月、西町排水路工事起工 十二月二十四日、鴨女町市街地造成が終了(二万八四二九坪)
33年(一九五八)	三月、種子島警察署、新庁舎竣工 四月、町役場東門より種子島高校までの横断道路工事始まる
34年(一九五九)	五月、旧農協建物(東町)を借用して、西之表町中央公民館及び西之表町図書館を開設 消防会館(六一坪)竣工
35年(一九六〇)	四月、明朗幼稚園開園(西之表中目) 三月二十八日、市立かもめ保育所開設。三歳未満一〇人、三歳以上五〇人を収容 四月、鴨女町キリスト幼稚園開園
36年(一九六一)	四月一日、種子島農業高等学校全日課程に化学工学科及び家庭課程を新設。種子島実業高等学校と改称 六月六日、西之表市青果市場開設 六月九日、西之表港を重要港湾に指定 六月二十三日、東町平原製油所で火災発生 十一月五日、新光製糖株式会社西之表工場完成
37年(一九六二)	二月二十四日、西之表市立定時制高等学校閉校式(二四年間卒業生六一〇人) 四月二十九日、種子島簡易裁判所落成

和暦(西暦)	榕城校区のできごと
38年(一九六三)	十月十二日、第一回鉄砲祭りが挙行される(鉄砲伝来四二〇周年記念)。市と東町が共催 十一月二十二日、種子島郵便局新庁舎竣工
39年(一九六四)	四月二十四日、国の総合庁舎、西之表小牧に竣工。 種子島税務署・鹿児島税関支署西之表監視所・種子島地区検察庁・鹿児島地方務局西之表出張所・鹿児島労働基準監督署熊毛分室・熊毛公共職業安定所・鹿児島食糧事務所熊毛支所・鹿児島統計調査事務所西之表出張所が配置される 六月二十三日、古園団地造成終了(九〇〇〇坪)
40年(一九六五)	熊毛支庁の解体新築に伴い、近辺集落の公民館に分散して業務を行う(昭和四十二年四月まで) 十月一日、西之表漁協城ノ浜にハマグリ三〇〇キログラムを放飼
41年(一九六六)	一月十日、熊毛支庁解体工事終了 一月二十二日、寿木の小路の拡幅工事終了 四月、榕城幼稚園開園
42年(一九六七)	六月十九日、東町公民館竣工 六月、川端川下水工事始まる 九月二十日、種子島電信電話局の建築工事始まる 二月十四日、県種子島合同庁舎落成 二月二十五日、鹿児島県種子島合同庁舎竣工
43年(一九六八)	四月一日、西之表市消防署発足 十二月二日、岳之田・小牧野間、農免農道起工 四月、池田公民館落成
44年(一九六九)	六月十三日、市内に青果物低温出荷調整施設完成
45年(一九七〇)	四月、西之表港埋立工事始まる 四月、旧電報電話局跡に市立種子島博物館開館

和暦(西暦)	榕城校区のできごと
45年(一九七〇)	五月一日、私立平和の園保育園設置
46年(一九七二)	三月十五日、市農協新庁舎落成 三月三十日、花里浜児童公園完成 四月十一日、西之表新港第一期工事が終了し、開港
47年(一九七三)	二月十九日、市民会館落成式 四月一日、鴨女児童館が完成し開館する
48年(一九七三)	二月七日、初めての交通信号機二機設置(種子島郵便局前、池田三文字)
49年(一九七四)	三月三十一日、中央墓地公園工事完成 七月一日、と畜場「洲之崎」閉鎖 十月、高浜橋竣工
50年(一九七五)	四月一日、美浜公園開設 四月五日、美浜児童館完成
51年(一九七六)	八月、天神橋(長さ四八・六メートル、巾一四・四メートル)完成 九月、市議会で西之表港内の公有水面埋立地を「栄町」と定める 十二月十日、公有水面埋立工事(旧池田港)完成 三月三十一日、旧池田港跡地に種子島産業会館が完成
52年(一九七七)	四月一日、栄町公園開設 九月四日、榕城小学校創立一〇〇周年記念式典 三月一日、八年ぶりに丸木舟が池田船溜まりで進水(安城大野長野實義作) 五月十日、新市漁協会館落成式 五月三十日、豪雨のため甲女川が氾濫。水源地冠水(一三〇メートル) 十一月三十日、鷗橋完成(長さ五八・八メートル、幅七・五メートル)

和暦(西暦)	榕城校区のできごと
53年(一九七八)	四月十五日、西之表市林業会館完成 六月二十日、深渡瀬造成事業(陸上自衛隊協力)完成 七月二十一日、慈遠寺跡に西町町内会の発企により顕彰碑を建立
54年(一九七九)	八月二十七日、岳之田公民館落成
55年(一九八〇)	八月三十日、天神沖埋立工事完成 三月二十日、牧之峯に「おにがさわいこの森」完成
56年(一九八一)	四月二十五日、市内に種子島公設地方卸売市場完成 四月一日、小牧線供用開始
57年(一九八二)	四月一日、嘉永山公園開設 三月一日、新城公園開設 三月二日、ショッピングセンター「サンシード」オープン
59年(一九八四)	三月七日、萬徳寺移転新築落成祝賀(上之原町) 四月一日、牧之峯飲料水供給施設給水開始(一日最大一八立方メートル、給水人口七〇人) 四月二十五日、今年川広報研修施設落成式 十二月十一日、東町公民館落成式 三月二十五日、深渡瀬団地を桜が丘団地に改称 三月二十五日、西之表市老人福祉センター完成 五月十四日、種子島開発総合センターオープン 三月二十日、岳之田簡易水道竣工(一日最大給水量三八立方メートル、給水人口一五〇人) 四月一日、農林・興畜の両地区が合併され、上之原町に名称が変更された。農林、興畜地区の人口は五三世帯、一六〇人 九月、岳之田部落創設百周年記念碑建立

平成		和暦（西暦）
元年（一九八九）	四月一日、西之表市シルバー人材センター発足 四月二十八日、種子島建設会館新築完成	榕城校区のできごと 三月二十日、西之表斎苑完成 十二月十日、桜が丘にゲートボール場完成 五月十六日、西之表市森林組合西之表チップ工場落成 八月二十七日、野首公民館落成祝賀式（鉄筋コンクリート造平家）
2年（一九九〇）	一月十四日、上之原町公民館落成式 九月九日、平田公民館新築落成	六月一日、朝日が丘集落発足
3年（一九九一）	七月十三日、老人保健施設「わらび苑」開設される	一月十八日、桃園―竹鶴線道路改良事業完成 六月十四日、鴨女町沖公有水面埋立工事完成 八月三十一日、西之表市民体育館建設工事完成 九月十二日、赤尾木橋竣工式
6年（一九九四）	三月三日、田屋敷公民館新築落成	十月一日、熊毛地区消防組合業務開始 十月二十三日、西之表市市制施行三〇周年記念式典（市民の歌制定、市民体育館竣工落成） 十一月十七日、市公営住宅（古園）木造二戸建二戸完成
15年（二〇〇三）	十一月二日、朝日が丘公民館完成落成式	



城ノ浜と競馬場〔現在の鴨女町〕（昭和初期か）



西之表港沖の汽船と多数のハシケ、見守る島民（昭和初期か）



唐人ガ浦と鉄砲場（昭和44年頃）



野久尾共立社〔郷中教育を取り入れた教育組織〕（昭和9年）

暮らしの風景写真